何をやらせたいんじゃ〜！！

魔死吐？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
何をやらせたいんじゃ～！！

【Ｎコード】
Ｎ１９７９Ｊ

【作者名】
魔死吐？

【あらすじ】
反則的な能力を貰ったは少年は異世界を渡り少女になった。そして少年だった少女はこの界渡りの意味を知らなかった。

プロローグ（前書き）

前に書いた作品が完結前なのに書き始めてしまった（笑）

プロローグ

気がつくとソコは草原。あたりを見渡してみても何も無い。
木の一本すら見当たらない。そんな場所にボクは居た。
ふと思い返してみる。昨日の夜の事を・・・・

ボクはいつもの様に学校の課題を終わらせて、眠ろうとしていた。
今日は課題をやっている気分じゃなかったけど、
学園では優等生で通っているボクにはやら無いわけにはいかなかった。
いままで課題を一度も忘れた事のないボクが、
もし提出しなかったらきっと先生が理由を聞いてくる。
今日の事は誰にも言うつもりは無いけど、彼女に知られたらきっと
責任を感じさせてしまう。
そうならないようにボクは課題を終わらせた。

布団に包まってふと思い出す。

「ふられちゃったな～・・・」

ボクは思わず呟いてしまった。

ボクは今日、2年間片思いを続けていた相手に告白し、玉砕した。

（ごめんなさい、君の事を友達以上に見る事はできない・・・）

今日の彼女の言葉が脳裏を過ぎる。

明日からどのツラ下げて会えばいいんだよ。

「この世界から消えてしまいたい。」

ボクはそう呟いた。

だってもう彼女の顔を学園で見ることがボクには苦痛にかわってしまったから・・・

『ちょうど良かった！そういう人を探してたんだよね！』

急に幼い少女の声が響いた、耳ではなく頭の中に・・・

「失恋のショックで幻聴まで聞こえてきたよ。」

ボクは苦笑を浮かべて枕に顔をうずめる。

『幻聴なんかじゃないよ！こっちを向いて。』

グイッ！

再び幻聴か？と思った瞬間、首がいきなり自分の意思に反して横を向いた。

「・・・・えっ？」

言葉も出なかった。ソコには小学生くらいの少女が頬を膨らませて怒った表情で立っていた。

少女が何でボクの自室に居るのか？

それより少女の体が金色に光って見えるのは気のせいだろうか？

様々の考えがボクの頭を駆け巡る。

『困惑しているね、しちゃってるね。始めまして私は《監視者（かみ）》です。』

監視者？　何だよそれ、そんなんが何の用だよ？

『ひどいな、君の言葉（ねがい）に答えて現れてあげたのに。』

少女はいつの間にか笑顔になってそう言う。しかしボクは背筋が寒くなるように感じた。

思考を読んだの？それにボクの言葉に答えた？

『世界から消えてしまいたい。君はそう言った。

ちょうど私もそういう人を探してたの。

だけどそれが勢いでの考えなら諦めるけど、どうする？消えてみる？』

少女は満面の笑みを浮かべて聞いてくる。消えたい人を探してた？

そこでボクの思考は一つの考えを導き出した。

《この世界で消える＝違う世界に行く》

監視者がなんなのか知らないけど自殺希望者をさとしに来たようには見えない。

ボクは彼女が普通の人間には見えなかった。だから神だと言われても信じられる。

だからボクはあることさえ大丈夫なら消えてもいいと答えた。

『あること？　あぁ、そういうことなら大丈夫だよ。』

少女がそう答えるとボクは消える決意をした。

『君が賢い人間で助かったよ、説明が省けて助かった。

ご褒美に準備期間と力をあげるよ。』

少女はそう言うと掌から光りをボクに向けて放った。

痛みは無い、ただ力が溢れてくるのを感じた。

『君が行くのは君が考えた通り異世界。文明レベルはこの世界の中世位だね。

魔物とか魔法がある世界だよ。楽しんでおいで。

あと、君にあげた力は全知全能（ぜんちぜんのう）の力だよ。本来なら神しか持てない力だけどあげるよ。

わかりやすく言えば何でもできるよ。例えば漫画の技が使えたりとか・・・』

うわっかなり反則的能力・・・

『もう使えるから準備しながら練習しなよ。じょあ明日のこの時間に迎えに来るね。』

そう言うと少女は去っていった。

ボクは自分の手を見る。少女が大丈夫だといってくれた事・・・

ボクが消えたらボクという存在の記録と記憶が一緒に消えてくれるかどうか。

もしボクの記憶が残れば彼女が心を痛めてしまうかもしれない。

だから消えるなら記憶や記録ごと消えたかった。

どうせボクは孤児だ、消えて心残りになるような肉親は居ない。

さて、準備しようかな・・・

あれから２４時間経った今、ボクは少女に異世界に連れて来られた。

問題はソコじゃない、一つはボクはこの世界に来て何をするのか、

それをまだ聞いてなかった。

そしてもう一つ、ボクは女になるなんて聞いてないぞ！

設定集（前書き）

本編の前に大まかな設定を書きます。

設定集

・人物

《主人公》

名前：無し（世界から消える決意をしたときに元の名前は捨てた為名前は無い。）便宜上《ボク》

性別：男⇒女

年齢：１８

身長：１６１⇒１４２

容姿：黒髪黒眼⇒白髪紅眼

能力：全知全能，魔法

武器：未所持

設定：頭の良い優等生。割と悲観的である。
普段は他者に優しいが非情な面がある。楽観的な面もありよくわからない人物

《監視者》

名前：無し
（監視者はその世界に1人しか存在しないので固体名を持っていな

い。）
便宜上《アースの監視者》
年齢：無し（監視者は世界の誕生と共に存在する不死者の為、年はとらない。）
身長：１３０
容姿：金髪蒼眼で全身が金色に光っている
能力：全知全能，監視者権限
武器：無し（監視者は戦う力を持っていない。）
設定：今後登場予定は無い。

・世界

無数に存在する空間概念，一つの世界に監視者が一人存在し世界のバランスを保っている。

《第１人界アース》

ボクが生まれ育った世界。

現実の地球と同義と考えて欲しい。

数少ない人間族が存在する世界の中でもっとも発達した世界。

《第５９魔界ヘルグラン》

ボクが渡った世界。

文明は中世のアース程度にしか発展していない。

魔族など様々な空想上の種族（エルフや吸血鬼等）が存在している。

魔法があり、魔物などが存在している。

・能力

《全知全能》

監視者とボクの能力。

監視者が使えば文字通り全知全能だが、人間であるボクには使いこなせない能力。

ボクには全知を使っても人類が知ったことまでしか知ることができず、

全能を使っても想像以上のことはできない。

コレは脳の許容量の問題であり、人間である以上ボクにはどうすることもできない問題。

それでも反則的な能力には変わりない。

ボクはヘルグランに渡って直ぐにヘルグランの公用語と常識を全能で知った。

《監視者権限》

文字通り監視者の権限。

対象を別の世界に飛ばしたり、存在を抹消できる。

《魔法》

超常の力ではあるが、全知全能とは異なり万能の力ではない。

それには様々な法則や公式，ルールがあって条件に当てはまらなくては使えない。

万人が使いこなせる可能性を持っている訳ではなく、才能に左右される。

3種類の魔法が存在している。

《通常魔法》

体内の生命エネルギーの一種である魔力操り使う魔法。

《精霊魔法》

大気中の魔素やその集合体である精霊の力を借りて使う魔法。

《召喚魔法》

魔力でも精霊でも何でも良いが別世界から様々な存在を召喚する魔

法。

・種族

《人間》

アースでは霊長類、ヘルグランでは最強にして最弱の種族。

《監視者》

世界の監視者、世界のバランスを保つ為に存在する不死者。

基本的に一つの世界に1人。

監視者同士でコンタクトをとって相談することもある。

ファーストコンタクト

監視者の作った《ゲート》とか言う空間の歪みに入る前にボクはいくつか説明された。

一つ、ゲートを使って世界と世界を渡るとき、生物以外は消滅してしまう。

もちろん服は生物では無い、だからゲートを潜る前に服を脱ぐこと。

二つ、世界と世界の狭間を通ることにより体に変化が起こる可能性があること。

大まかに言えばその二つか。

監視者と言っても女性の前で全裸になれるほどボクの精神は強くない。

なのでボクは水着に着替えてゲートを潜った。もう学園に行かない以上は必要ないから。

ボクはゲートに入った瞬間から意識が無く、気がついたらこの草原に立っていた。

最初はただ違う世界がどんな場所なのかという好奇心が挫かれたのは言うまでもない。

なんせ最初に出たのは何も無い草原なのだから。

でもそれは感謝した方が良かった、何せ今の自分は恐らく全裸だ。
水着は監視者の言う通り消滅してしまったのか肌に当たる風が寒い。
ボクはとりあえず服を着ようと思い、手を前に突き出した。
「開け、幻想空間（イマジンルーム）」
ボクがそう呟くと、目の前に真っ白い扉が現れる。
ボクは何も言わずその扉を開くと迷わず中に入った。

ソコは壁も天井も真っ白な部屋だった。
この部屋こそボクが全知全能の力で最初に作った空間だ。
違う世界に行く＝拠点が必要
そういった思考が生み出したイマジンルーム
此処にはボクの服や元の世界で必要かと思った物が収納されている。
ボクはクローゼットを開くと服を何着か取り出してふと気がついた。
自分の体にどんな変化が起こったのか？
そう思うと予め作っておいた浴室の脱衣所に入り、等身大の姿見で

自身の体を映した。

髪の毛が真っ白になっていた。コレは問題ない。

瞳の色が炎のような真紅に染まっていた。コレも問題ない。

胸が膨らんでいた。・・・・・大問題だぁあああああ！！

それに気がついた瞬間、ボクは姿見を食い入るように見つめる。

ソコにはあどけない表情をした白髪紅眼の全裸の美少女が、

此方を食い入るように見つめている姿が映っていた。

街中で見かけたら思わず目で追ってしまうような、

近くに居たら声を掛けてしまいたくなるそんな美少女にボクはなってしまった。

年齢的には１０代前半くらいに見える、それでも全裸の美少女だ、

ボクの鼻から一筋の赤い液体が・・

ヤバい、此れはとてつもなくヤバいぞ。

いくら初見とは言っても自分のこの世界での姿に欲情してしまった。

ボクは数分間　鬱（うつ）になりかけていたが、ふと気づく。

ボクは本当に女になったのか？

確かに胸は膨らんでいる。だが肥満男性でも胸はある。

ボクは恐る恐る自分の男の象徴を確かめた。

数秒後、屍になったボクが転がっていた。

えぇ、完全な女になってましたよ、はい。

ボクは鼻から滝のように流れる赤い液体が止まったのを確認してから自分の体を調べ始めた。

主に身長と3サイズだ。

服は前の世界のボクの物しかない。

したがって明らかに体格の違う今のボクには着ることはできない。

髪もだいぶ伸びているようで腰まであった。

身長は１４２センチか、コレは思っていたより縮んでいる。

３サイズは此処では言えないが出る所は出て締まる所は締まっていた。

もしかしたらインドア派だった前のボクより健康体かもしれない。

力や体の動きも確かめたったが、その前に服が着たかったのでクローゼットまで再び戻る。

ボクは自分が着ようと思った服を取り出すと、今の自分に合うよう改造する。

勿論、全知全能の力で・・・

まずは下着。ブラジャーなんてものは持ち合わせていないので、

薄いシャツを着てボクサーパンツを穿く。

その上から僕の改造し、特殊効果を付けた黒のズボンとワイシャツを着る。

付けた特殊効果は伸縮自在に形を変えることと自動再生効果だ。

ボクは黒いロングコートを羽織った。

このコートは亡くなった父親の形見だ。

ボクが5歳の頃に大学を出るまでに必要な額のお金を残して死んだ父。

そんな父との唯一の思い出の品だ。

前のボクでも丈が長くて着れずしまわれていたモノだが、

全知全能で改造する事で着れるようになった。

ボクはどうしてもこのコートに傷つけたくなくって伸縮自在の他にもう一つ効果をつけた。

それはコレボクがを着ることによって、
どんな攻撃も霧に攻撃したかのように僕の体を通り過ぎてしまうというモノだ。
ある意味無敵の効果だ。そして改造したことによってあまった生地で作った黒いマントを羽織る。
このマントはフード突きで自動再生効果と、
着ることによって気候の変化を感じさせなくする効果を付けた。
これでどんな厚着でも熱くないし薄着でも寒くない。
コレによって全身黒尽くめ白髪紅眼の少女が出来上がった。
ボクはとりあえずイマジンルームを出て再び草原に出る。
これからこの世界に住む人たちとのファーストコンタクトに向わなくちゃいけない。
その為に公用語と一般常識を知る必要がある。
ボクは全知全能を発動して情報を集め始めた。

急展開だな、おいっ！

全知で知ったことはいくつかあるが、今説明すべきことは・・・

この世界には３つの大陸があり、各大陸に大小様々な国が存在すること。

その中でもっとも強大な国が３つ。

中央大陸にあるパラメニア王国

西大陸にあるガルド帝国

東大陸にあるマルフェス皇国

この３国は覚えておいた方が良いだろう。

そして今ボクが居る場所は西大陸のガルド帝国領の悠久の草原と呼ばれる場所だ。

とりあえず帝国内の町を目指すことにしよう。

次に、言語なのだが・・・

実はこの世界には言語は一種類、ヘルグラン言語というモノしか存在しないとのことだ。

コレはボクにはありがたい話だった。

前の世界のように国によって異なる言語を使われては正直困ってしまった。

全知を使うと頭の中に何かが流れ込んでくる感覚があって正直気分が悪い。

だから言語のために多様する必要がなく本当に助かった。

この世界の通貨はセルといって1セルが1円と同じ価値だった。

そこで問題なのは、どうやってセルを稼ぐかだ。

この世界にはギルドと呼ばれる組織が各国に存在し、

そこで草むしりから要人の護衛，魔物や盗賊の討伐など様々な依頼をしたり受けたりできる。

ギルドで依頼を受ければ簡単にセルが手に入るがそれにはギルドに登録する必要がある。

この世界で何をすべきか知るまでは極力この世界の人に関わりたくない。

それなのに登録するなんて問題外だ。

ならばどうするべきか？

思案を膨らませていると、急にボクの体を何かが通り過ぎていった。

ロングコートの特殊効果でダメージは全く無いが、正直心臓が止ま

るかと思うくらい驚いた。

ボクは通り過ぎて行った何かに視線を向ける。

ソコに居たのはライオンとサイを混ぜ合わせたかのような姿の魔物だった。

ボクは全知の力で魔物のついての最低限の知識を探る。

名前はグライガー、上級の魔物だ。恐ろしい速さと力を待っているそうだ。

恐らくボクなんて彼の大きな口で噛まれればひとたまりも無いだろう。

だけど今のボクに逃げるという選択肢は用意されてない。

何故か？　そんなの簡単な話だ。グライガーは群れで行動する。

そう、ボクの周りを１０頭のグライガーが取り囲んでいるのだ。

「やれやれ、ボクなんか食べても上手くないだろうに。」

ボクはそうため息をつくと、思案し始めた。

防御面は外側からの攻撃には完璧だが、攻撃方法が思いつかない。

ボクは漫画は読んでいたが、多対一の場面はなかなか少なかった気がする。

ここはとっさに思いついたあれで行くか・・・

「迂闊だったよね、ボクも・・・君たちも。」

ボクはそう言うと両手を左右に広げた。

その瞬間、グライガーの群れは一瞬でバラバラの肉片へと変わった。

何をしたかって？　ボクは鋼糸を作り出して曲絃師（きょくげんし）の真似事をしてみた。

たしか昔読んだ小説で糸を使って相手をバラバラにするこの技術に憧れたのを覚えていた。

しかし流石は全能の力だけあって、ボクのような素人に糸使いの最高峰の技術を使えるとは・・・

なんだか軽い高揚感を覚えた。

しかしボクは直ぐに現実に引き戻される。

いつの間にか現れた兵士のような格好をした人たちに囲まれて、

鋭い槍を向けて威嚇されていたのだ。

どうやらボクがグライガーの群れを一瞬で肉片に変えてしまうところを見られていたようだ。

その中のリーダーのような青年がボクを睨みながら前に出てくる。

「私はガルド帝国白銀騎士団団長レイル＝ザーシンだ。」

そう高らかに名乗りを上げる。

レイル団長が言うには彼らはグライガーの討伐にやって来て、

群れに囲まれているボクを発見したらしい。

助けようとした瞬間、

彼らの目の前でグライガーを迂闊にも肉片に変えてしまったボクを警戒しているようだ。

本当に迂闊だった。関わりたくないのにコレだけ目立っていては話にならない。

「貴様はいったい何をした？」

レイル団長が恐ろしい目でボクを睨んでくる。

「糸を使いました。」

此処は隠さなければならない場所だろうけど、ボクはそう意識的に答えた。

何故かって？　決まっているだろ、嘘をついたって状況が悪くなるだけだ。

それに言い訳も思いつかない、なんせ彼らの目の前でやってしまったのだから。

「糸だと？　戯言を言うな。糸でどうやって魔物を殺せる？」

レイル団長の目が更に鋭く変わる。

「事実だからしかたありませんよ。」

ボクはそう答えると微笑みえを向ける。

その笑みをどう受け取ったのか、レイルは腰の剣を抜いてボクに向けた。

「我らを馬鹿にするのもたいがいにしろ。これ以上ふざけた事をぬかせばその首をはねる。」

彼の目は真剣（まじ）だった。やれやれこうまで頭が固いとは・・・

さてどうやってこの状況を潜り抜けようかな？

さて、困った問題だ。

ボクは今、手足を拘束されて牢に閉じ込められている。

コレには三つの理由がある。

一つ目はボクの実力の片鱗を目撃されてしまったという事だ。

ギルドにも登録していない自称旅人であるボクが上位の魔物をバラしてしまった。

そんな所を目撃されれば危険人物扱いされてもしかたがない。

あれはこちらの世界では異常でしかないのだ。

二つ目はボクの髪の色の問題だ。

コレを話すにはまず魔力の説明からしよう。

魔力とは一般的に魔法を使うときに消費する生命エネルギーの一種のことである。

魔力の量が多いほど強力な魔法を使える。そして魔力には６つの属性が存在する。

自然界のエネルギーに酷似した魔法を使える火，水，風，空，地からなる五行属性。

肉体の治癒や強化、人体の未知の性能を引き出す魔法を使える無属性。

これがこの世界に存在する魔力属性である。

どんな魔力量でも一人につき一つの属性を持って生まれる。

そしてその魔力属性は目に見える形で他者も自身も知ることができる。

理屈はわかっていないが魔力属性は頭髪に影響を与えている。

火＝赤　水＝青　風＝緑　空＝黄　地＝茶　無＝黒

このように髪の色は６種類存在する。それがこの世界の常識だ。

そこで問題なのはボクの髪の色が白だということだ。

ここで存在しない白髪を持つボクが現れた事が何より問題視されている。

これは界渡りの影響で、こればかりは仕方のない問題だ。

三つ目はボクが名前を名乗らなかったことだ。

今のボクは前のボクとは違う世界の違う人間だ。

だから世界を捨てたボクに前の名前を名乗る資格は無い。

つまりボクは今、名前が無い不審者だ。

コレはボクの小さなプライドの問題だ。
とにかくボクは今、自分がこの国でどう扱われるかの判断を待っているところだ。
漫画の先入観で、帝国＝悪なんてイメージがあるから内心ドキドキしている。
そういえばレイル団長は赤髪だったな、火属性か・・・
ボクが暢気なことを考えていると牢の扉が開かれてレイル団長が入って来た。
「こんにちは団長さん、ボクの処遇が決まったんですか？」
ボクはレイル団長を見ながらそう聞いた。
「・・・貴様にはコレからこの城の主に会ってもらう。」
そう言ってボクの足枷が外される。
「いいんですか？　ボクのような不審者が。」
自分で自分を不審者呼ばわりするのは変な気分だが、まぁ仕方がない。
「それは貴様の気にすることではない。
万が一のことがあれば貴様を排除するだけの問題だ。」

なるほど、自分の力に絶対の自信を持っているのか。

「そうですね。で、主さんはどういった方ですか？」

とりあえず聞いてみた。答えは期待しない。

「知らずにこの町へやってきたのか？」

レイル団長が初めて見せる驚いた顔があった。

「えぇ、ボクはただ風の向くまま気の向くままに旅をしているだけですから。

その町にどんな領主が居るかは調べてないんですよ。」

まぁ、口からでまかせだが。こう言っておけば誤魔化せるだろう。

「そうか、まぁ教えてやろう。

この城の主はガルド帝国第二皇女レンシア＝デモン＝ガルド様だ。」

っ！　いきなり皇女様？　さて、困った問題だ。

第二皇女

このサウスタウンという町にあるこの城の謁見の間で、
ボクは赤髪の１５歳位の少女と向かいあっている。
彼女の名前はレンシア＝デモン＝ガルド。帝国の第二皇女様だ。
何故第二皇女様が帝国でも片田舎に位置するこの城にいるのか？
ボクはそれが気になったが口には出さなかった。
「貴女がグライガーを討伐したという旅の方ですか？」
第二皇女様は穏やかな口調でボクにそう聞いてくる。
この世界で始めて礼儀正しい口調に出会えたが、ボクはそれどころではなかった。
この皇女様は純白のドレスに身を包んでいた。ソコまでは良い。なんせ皇女様だ。
だが解せない事に、
皇女様の背中にはドレスとは対極的な漆黒の蝙蝠（こうもり）の翼に似た翼が生えていた。
ボクはとにかくその事が気になった。あれか、此処は魔族とか言う

のの国かもしれない。

なんせ異世界だ、魔物が居るくらいなら上位存在の魔族くらい居るだろう。

おっと、皇女様の質問を無視するわけにはいかないね。

「はい、その通りです。」

手枷が無ければコレでもかという程に恭しい礼を見せていたが、仕方がない。

ボクは軽く会釈して皇女様を再度見る。

「では早速ですいませんが、私よりも華奢（きゃしゃ）な貴女が、グライガーを討伐するのに使った武器が糸だというのは本当ですか？」

穏やかな表情の皇女様だが、内心は疑心と好奇心で埋め尽くされているようだ。

「はい。」

ボクは短く答える。

「では見せていただけませんか？」

は？　こんな場所で何に対して技を振るえと？

「実は今、兵士の訓練用の案山子を用意してあります。
それをあなたの糸で切り裂く所を見せていただけませんか？」
やれやれ、そこまで準備しているという事は強制しているのと一緒だろ。
「わかりました。」
しかたない、見せてやるか。ボクは手枷を外して貰うと用意された案山子と向き合う。
ボクは鋼糸を創造すると、それを案山子の首に巻きつけて軽く引っ張った。
ゴトッ・・・
手ごたえを指先に感じたと同時に案山子の首が地面に落ちた。
謁見の間に居るお偉いさんや騎士たちが息を呑むのを感じる。
「コレで信じて頂けましたか？　第二皇女様。」
ボクは呆けている皇女様に意地の悪い笑みを向けてそう聞いた。
「え、えぇ、有難うございます旅人さん。」
皇女様は驚いたように此方を向くと、引きつった笑みを浮かべてお礼を言った。

「すみませんが、私には貴女にいくつかお聞きしたいことがあります。

勿論お答えしたくないときは黙秘してくださってかまいません。」

皇女様は短く息を吐くとボクにそう言ってくる。

「何でしょうか？」

「貴女の髪の毛、それは地毛ですか？」

いきなりソコを付いてくるか。コレは思ったより攻撃的な皇女様のようだ。

「えぇ、ボクは生まれつきこの髪です。」

無論真っ赤な嘘・・・とも言えないか。

なんせボクはこの世界で生まれ変わって別人になったとも言えるからね。

「そうですか、では貴女の魔力属性を教えていただけませんか？」

ふむ、コレもなかなか答え辛い質問だな。案外捻くれた性格なのかもしれない。

「申し訳ありませんがボクは魔力属性を調べたことが無いんです。

こんな髪の色で生まれた身としてはどんな結果が出るのか恐ろしかったもので・・・」

ふむ、上手くいけば自分の魔力属性を調べさせてもらえる。
やっぱり魔法のある世界に来たなら一度は使って見たくもなる。
「そうでしたか。今から調べさせていただきたかったのですが、そういったことなら・・・」
「かまいませんよ。」
ボクは皇女様の台詞に割り込むように話す。
「最近ボクも魔法に興味を持っています。コレを機に自分の能力を知りたくなりました。」
ボクは満面の笑みを浮かべてそう言った。ようは調べさせろと言っているのだ。
「わかりました。」
皇女様がそう言ってから暫く待つと透明な水晶が運ばれてきた。
「この水晶に手を置いてくだされば貴女の魔力属性を知ることができます。」
この水晶に向けて全知の力を使う。コレは幻像化の宝玉という道具だ。
触れた対象の属性によって火なら火の幻を作り出す水晶だ。

因みに幻の大きさによって魔力量も知ることができる。

ボクはそれを知ると、右手で水晶に触れた。

だが断わる！・・・そう言えたらな～。

ボクが手を置いたと同時に凄まじい光が水晶から放たれボクを除く全員の視界を奪う。

しかし界渡りの副作用か何かで強化されたらしいボクの目は何が起こったのか見えてしまった。

光りの中では水晶の中に山火事のような炎が映ったかと思うと、

海を連想させる量の水が上から降ってきてその炎を消し、

海は突然盛り上がった大地に吸収され、大地は嵐に削られて、

嵐は雷で霧散していく。そして雷は何も黒い空間に消えていった。

つまりどういうことだ？　炎は火、海は水、大地は地、嵐は風、雷は空そして最後のは無か・・・

それはつまりボクは全ての属性を使えるてことか。

なるほど、だから存在しない白なのか。

全知全能だけでも反則なのに全属性か。まったく何をさせたいのか全く理解できない。

ココまでの力をよこしてただ異世界を楽しめなんて言わないだろう。

一度この世界の監視者に会ったら聞いてみないとな。

さて、ようやく光りが消えた。全員の視力が回復するのに時間はかからないだろう。

それに魔力量はボクが見ても判断できないからサングラスでも付けてもう一度見てもらうか？

まぁ、とにかくなんて説明すべきか。

「っ・・・いったい何が起きたのですか？」

皇女様が両手を目に当てながらそう呟くように聞いてくる。

「第二皇女様、ボクの属性がわかりました。」

ボクはこの際だから本当のことを言っておくことにした、

何かあって全知全能を見られたときに全属性だと認識させれば説明が簡単だからだ。

ちょうどいい、魔法についてとついでに魔族について知っておこう。

できれば人間の国に行きたいしね。ボクは全知を使った。

？　おかしい、魔法で何ができるか知ることはできたが人間の国についての情報が無い。

もしかしてこの世界には人間は1人だけ、つまりボクしか居ないのか？

・・・・まぁ良いか。言葉さえ通じれば人間でもそうじゃなくても関係ない。

それよりもボクが想像してたよりも魔法とは複雑なモノのようだ。もっと簡単に使えると思っていた。まぁ暫くは全能の力に頼るとしよう。

正直必要以上に全知全能は使いたくない。楽しみが減るからね。

さて、そろそろ皇女様や他の皆さんも回復してきたかな？

ボクはそう思って謁見の間を見渡す。レイル団長に睨まれていた。まぁ仕方ないか・・・

いきなりフラッシュじゃ、特にみんなが凝視したんだからね。

やっぱり白髪がどんな属性なのか気になるようだ。

「属性がわかったのですか？　教えてください、どんな属性ですか？」

やっぱり一番興味を持っているのはこの皇女様だろう。

「ボクの属性は便宜上一《全》とでも言っておきますよ。」

ボクは軽くおどける様に言った。さて、反応を見せてもらおうか？

「っ・・・全、つまり全ての属性が使えると？」

「えぇ、ボクの目がおかしくなければ。」
もう一度見せるとさっき考えたが魔法について調べたときに魔力量の見分け方はわかっている。
「とても信じられない話ですが、貴女がそう言うならそれで良いでしょう。」
良いのか？　まぁ深く追求されるよりもありがたいけど・・・
「さて、次の質問です。貴女は何処から来て何が目的でこの国に？」
ふむ、何処から来たか。コレはもう答えは決まっているからいい。
何をしに来たか？　普通に観光と休養でかまわないか？
「ボクはジパング国から来ました。
この国に来た目的は観光と休養ですね。」
ボクはとにかくそう答えてみた。ジパングなんて国はこの世界に存在しない。
「ジパング？　失礼ながら聞いたことが無い国ですね。」
よし、のってきた。
「それは仕方ありませんよ第二皇女様。ジパングを知るのはジパング出身の者だけです。

なにせジパングは初代国王の張った結界魔法で覆われています。
言わば隠れ里ならぬ隠れ国のようなものです。一つだけ明かせるのは島国ということですね。」
結界魔法はどの属性でも使える一般魔法の一つだ。
様々な用法があるがバリアのようなモノが一番近いだろう。
「そんな国があるのですか。ではジパングには貴女の様な白髪にの人も何人か？」
「残念ながらボクが知っている中ではボクだけです。」
ボクは苦笑を浮かべながら答える。ジパングとは日本のことだ。
結界うんぬんの話は大嘘だが他は間違っちゃいない。
白髪に染める人は居るけど、地毛で白髪はまず居ない。
「そうでしたか。では貴女の種族を教えてください。」
種族か・・・この世界には沢山の種族が暮している。
皇女様のような悪魔族、耳の尖ったエルフなど様々だ・・・
「ボクは・・・人間族です。」
それでも他の種族と偽らず、ボクはそう答えた。

人間が居ないなら誤解させてやれば良い。
コレも全知全能が見られたときの保険だ。
「ニンゲン族ですか？　それはジパングのみに居る種族ですか？」
さっきから質問が多いな。自分で質問オッケーって言ったけどちょっとイライラしてきた。
「まぁそうですね。もっともボク以外に生きてる人間族は居ませんけど。」
ボクはそう答える。まぁ人間がボク以外に居ないのは本当だしね。
「それは申し訳ないことを聞いてしまいました。」
皇女様の顔が悲しそうに曇る。
「いえ、事実だから良いんです。第二皇女様が気にすることではありませんよ。」
まったく感情表現が豊かな皇女様だ。こんなのが皇族で大丈夫かこの国は？
「そうですか、そう言ってくださるとありがたいです。
それではコレを最後の質問にさせていただきます。」
「何でしょうか？」

やれやれ、やっと終わるか・・・

「私の近衛軍に入りこの国に力を貸してくださいませんか？」

「はい？」

近衛軍？　あれだよな、君主の護衛とかする・・・

「突然で申し訳ありませんがグライガーを一掃できるほどの腕前、今の私にはどうしても欲しいのです。」

今の・・・か、訳ありだな。さてどうする？監視者からが指示があるまでやることもないし・・・

後ろ盾と衣食住が保障されれば動きやすいか。

「条件付きなら了承します。」

ボクはあえてそう言った。訳ありの女子供を見捨てるほどボクは薄情じゃない。

条件さえ良ければある程度のことは付き合ってやる。

皇女じゃなくて皇子だったら切り捨てていたかもしれないけど。

まぁ、礼儀正しい人間は嫌いじゃない。　あ、人間じゃないか・・・

「条件？」

「えぇ、一つはボクが望めば何時でも辞めれるようにしてくれること。

二つ、ボクの行動を軍規なんかで縛らないこと。

この二つさえ守っていただければボクの力を貸しましょう。」

辞めれることと規則で縛らないこと。ようは監視者からの指令があったときの保険だ。

「その二つだけで良いのですか？」

皇女様が驚いている。もっと欲深く条件を出されると思っていたのだろうか？

「しいて言えば服装の自由ですね。」

ボクは冗談っぽくそう言った。

「くすっ、わかりました。ではお願いしますね旅人さん。」

こうしてボクと皇女様の契約が結ばれた。

主人の命令くらい聞けよ。

ボクが近衛軍に入隊した後、ボクは皇女様、

・・・いやレンシア様の部屋に連れて来られた。理由はわかっている。

不審者であるボクを腕が立つからというだけで近衛軍に入隊させるなんておかしい。

ボクは通された部屋で丸テーブルを挟んでレンシア様と向かい合って座った。

「まずは突然の私の申し出を快く了承してしてくださったことに感謝します。」

レンシア様は頭をボクに下げてそう言った。

「かまいませんよ。所詮ボクは風来坊、住む家も無ければ帰る場所も無い。

ボクの命なんかで良ければ条件次第でお貸ししますよ。」

ボクは出された紅茶のような飲み物、レビアを飲みながらそう返す。

「ずいぶんと正直なのですね。」

さっきまでとは違い。一応敬語は使っているが、

主への敬いどころか皮肉の籠もったボクの言葉にレンシア様は驚いている。

「えぇ、ボクは理由を告げずに戦わせる主は信じてませんからね。何よりも2人きりで話すといっておいて何人も部下を忍ばせているのはいかがかと？」

ボクはレビアに口を付けながら上目使いにレンシア様を睨む。

「確かにその通りですね旅人さん。

それにしても彼らのことを見破るなんて驚きです。」

別に見破ったわけじゃない。全知の力がオートに発動し、何人か潜んでいるのがわかったのだ。

「実は貴女を雇おうと思ったのは皇族の皇位継承に関しての取り決めが関係します。」

レンシア様曰く・・・・

王たるものいついかなる時も強くあること。

王たるもの力ある部下を束ねること。

この初代帝王が残した二文が帝国の皇族に伝わる皇位継承の条件らしい。

帝国の二代目帝王はこの文から、
皇族の近衛軍同士を戦わせて勝利した者に皇位を譲ることを決めた。
それは今も続いており、その試合は今代は来月行われることになっていた。
なので優秀な、それでいて信頼できそうな傭兵を探していたらしい。
ソコに白羽の矢が立ったのがボクだったようだ。
「要するに軍を使った兄弟喧嘩で王を決めるんですね。」
「要約すればそうなりますね。」
ボクの解釈にレンシア様は苦笑を浮かべる。
「しかしボクには釈然としませんね。
ボクは貴女は急いで人数を集める程皇位に執着しているようには見えません。
逆に貴女は自分が国民の上に立つ人間だと思っていない。」
ボクは思ったままを口にする。周囲から殺気が向けられる。
部下には好かれている様だ。もっとも人柄だけで王になられても困る。
腹芸もできないような無能者なら特にだ。

「私も自分は王の器だとは思っていません。」

さすがに言い過ぎたのか俯きながら語りだした。

「実は私の兄達と姉は私の目から見ても王になるべき人間には見えません。

しかし弟には幼いながらも王の資質があります。

幼い弟にはまだ近衛軍はありません。なのでこの試合に出れないのです。

私は弟こそ時期帝王にふさわしい。そう思うからこそ兄達と姉に負けられません。」

レンシア様はそう意志の籠もった瞳でボクを見ながらそう力説した。

「弟君が成長して王となりうる年齢になるまで王座を守ると？」

「はい。」

ボクの問いかけにレンシア様はそう答えた。

まったく国思いなのか弟思いなのか・・・

「わかりましたよ。じゃあ試合についてのルールを説明してください。」

ルールを知らなければ動きようがない。

おそらくギリギリのタイミングでボクを誘ったんだ、
規定人数かそれ以下の人数しかこの近衛軍には居ないのだろう。
ボクとレンシア様を除けばたったの3人しか見張りが居ないからね。
「お待ち下さい、レン。」
見張っていた1人が姿を現してボクの前に姿を見せる。
「どうしたのですか、ツバキ？」
レンシア様が困惑したようにそう聞く。
「私にはどうしてもこの娘が信用できません。
糸を操る技術は確かに凄いと思いましたが、それよりも得体の知れない者です。
私や他の近衛騎士たちもこの娘に背中を預けるなんてできません。」
ツバキと呼ばれた緑髪の少女がボクを射抜くような目で睨みつけてくる。
やれやれ失言が多すぎたか？
「ではどうせよと言うのですか、ツバキ？
現状では彼女以外にはまだ条件を満たせる方は居ませんよ。」

その言葉をレンシア様が口にするとツバキさんは不適な笑みを浮かべて。

「では私達近衛軍と戦わせて誰かに触れたら合格というのは？」

なんだか不本意な方に流れが行っているぞ？

「いいでしょう。旅人さん、絶対に勝ってくださいね。」

ははっ、なんでこうなるのかな？

思っていたより使えるね。

ボクは今、この城・・・スベート城にある闘技場に来ている。

１０？の石で出来た巨大な舞台の上でボクと対峙するように立つ４人。

この４人がレンシア様の近衛軍らしい。軍というより部隊だね。

第一皇子の近衛軍は１００人以上居るらしいけど、少数精鋭（しょうすうせいえい）であることを期待しよう。

１人目はこの戦いを進言したツバキ＝ロットマン隊長

緑の髪から考えて彼女は風属性だろう。彼女はエルフらしい。

エルフは魔法に優れた種族なので魔法をメインに戦らしいが、

今回はレイピアを持っている。

２人目は黒髪の青年ゼルク＝ファレッザ。

彼は竜人であり、西洋刀を武器に持っている。近接戦闘型だろう。

３人目は青い髪の少女レイナ＝キャレンディア。

彼女は獣人で、頭から何の動物かわからないが耳が生えている。

彼女は今のボクと同じくらいの身長なのだが、身の丈を超えた巨大な斧を使う。

最後の1人はレンシア様の部屋で監視していなかったようで、

初めて感じる気配だった。黄髪の少年ルイズ＝レルカミア副隊長。

彼は鳥人で、弓矢を使って戦うらしい。

さて、コレが近衛軍の面子(めんつ)か・・・

今回ボクは鋼糸の使用を禁じられている。

同じように向こうも魔法を禁じられている。

理由は殺傷能力が高すぎるからだ。なので全員が木製の武器に持ち換えることになった。

ボクは鋼糸の変わりに短い短剣を2本選んだ。

理由は簡単、ボクは長物は好きじゃないからだ。

槍なんて使い辛くてかなわない。コレは単にボクの腕の長さの問題だ。

日本刀なら使ってみたかったが、残念ながらそれに似た武器は用意されていない。

言い忘れていたがボクの体に起きた副作用は視力だけじゃない。

身体能力も格段にあがっている。今回は体の動きになれることも目的に入っている。

ボクが選び終わると全員が既に準備ができていた。

隊長さん、ゼルクさんはそのまま自身の武器を木製に変えたような木刀を持っている。

レイナちゃんはハンマーのようだ。木製でも当たれば最悪死ぬだろう。

最後に副隊長くんは矢じりの代わりに布が巻かれた矢を持っている。

さて、模擬戦とはいえ初の対人戦だ。気合を入れなくては。

審判はレイル団長がやることになった。

「コレより白髪の旅人　対　レンシア様近衛軍の模擬試合を始める。期間は日暮れまで。双方最後まで諦めぬこと。

では・・・・はじめ！」

レイル団長の声で初めに動いたのは隊長さんだった。

普段後衛だろう彼女がいきなり突っ込んで来るとは驚きだ。

ボクは隊長さんの木製レイピアを右の短剣で受け流し、左の短剣を頭に向けて振り下ろす。

しかしその攻撃は外れる。ゼルクさんが彼女の鎧を掴んで後ろに引っ張ったのだ。

思っていたよりゼルクさんは冷静なようだ。何故彼が隊長じゃないのだろう？

まぁボクの勝利条件は誰か1人に触れることだから気楽にやるか。

ボクがそう思った瞬間、顔の横から何か危険が迫っていることを感じて慌ててしゃがむ。

ブンッ・・・

ボクの顔があった位置を巨大木製ハンマーが通り過ぎた。

いやいや殺す気ですかレイナちゃん？

ボクは背中に嫌な汗を感じた。

ロングコートの能力で自分の体を通り抜けるだけとは理解していても本能的に避けてしまう。

それが隙を生んだ。

気が付くとボクに向って上空から副隊長くんが矢を放っていた。

やれやれ、コレは予想以上だった。仮にも相手は軍人。

いくら身体能力が上がっていても素人が相手になるレベルではないか。

しかし此処で負けるつもりはさらさら無い。

全能の力を発動しイメージする。内容は全ての矢を短剣で打ち落とすボクだ。

副隊長くんの矢を全て打ち落としてボクは駆け出した。

狙いは隊長さんだ。彼女はボクのことが気にいらなようで無謀な行動をとってくる。

開始と同時に駆け出すなんてまさにその表れだ。

ボクは足に力を籠める。

「縮地(しゅくち)。」

幻の歩法、縮地で一気に彼女の背後に回りこんで短剣を背中に突きつけた。

「うそっ、いつの間に・・・」

信じられないと言った声で隊長さんが弱弱しく呟く。

「勝者、白髪の旅人!」

レイル団長が高らかに宣言した。

コレで近衛軍には問題なく入れるだろう。

反則技を使ってしまったことがいささか心苦しいがまぁ結果オーライか。

予想以上に近衛軍も強かったしね。

ボクはそう思いながら腕の力を抜いた。

何事も準備ができてこそ成功に繋がる。

ボクは今イマジンルームに居る。何でかって？

それは例の試合まで後一月しかないので王都に向って明日この城を出るからだ。

イマジンルームがあるから準備は不要じゃないかって？

ボクが準備しているのは武器だ。本番では木製の武器ではなく真剣でやり合うそうだ。

死者を出さない事が試合のルールにはある。それなのに真剣を使うという事は、

真の強者なら真剣を使っても相手を殺さずに無力化できる筈だという考え方らしい。

真剣ありの試合なので鋼糸の使用は可だと言いたい所だが、

ボクは曲絃師の技は相手を殺す為の技という先入観を持っている。

正直に言えばまだ全能の力を使いこなせていないボクが，

対戦相手に使うと間違いなく殺してしまう。

それを考えると使用を禁止しなければならない。

もっとも相手に巻きつけなければ良いので鋼糸はサポート用に手袋

に仕込むことにした。

ボクが鋼糸を仕込む為に用意した手袋は真っ黒な手袋だ。

コレはロングコートに合わせて町で買ったモノだ。

全能の力で防刃と耐電性能をプラスしてある。

防刃は鋼糸で手袋を駄目にしない事と、相手の刃物を掴むかもしれないのでその対策だ。

耐電は昔読んだ小説の曲絃師は糸に電気を流されて技が使えなくなっていたのでその対策だ。

それとボクは鋼糸の変わりにメインで使う武器を考えている。

ナイフや短刀は使いやすい。いっそのこと大剣なんて使ってみたら面白いかもしれない。

まぁ此処は銃も悪くは無い。余談だがこの世界には銃は無い。

魔法という遠距離攻撃のできるすべがあるこの世界には不要なのかもしれない。

だからこその銃だ。よし、銃にしよう。

ボクはイメージする。頭の中にある銃の形を・・・

掌が重みを感じて目を開くと、ボクの手の上に大型の片手用の白い銃が現れる。

この銃はボクの中の魔力を圧縮して打ち出せるようになっている。
つまりボクの魔力が無くならない限りは弾切れは無い。
名前はそうだな、白いから白夜(びゃくや)で良いだろう。
弾が魔力の塊なので魔法との相性も良い筈だ、炎の弾とかカッコいい。
因みに接近戦対策で、白夜は信じられない位に硬い。
こいつならよっぽどの武器が相手でないと傷一つ無いだろう。
銃身で相手の剣を受け止められるのは素晴らしい。
まぁ一応は接近戦用に短剣を2本作ってベルトに刺しておいた。
この短剣は投擲(とうてき)もできる形状で鋼糸と併用すれば相手を驚かせる位はできる筈・・・
これで準備は万端か。
ボクはイマジンルームから出て城の中にあてがわれた自室のベットに倒れこんだ
いきなりの魔物との実戦だけでもやれやらなのに対人戦までか。
実際に戦ってみてボクは如何に自分が反則的なのか理解した。

正直まだ戦い慣れをしていないボクが正規の軍人、
それもエリートに当たる人たち４人相手に良い戦いができたと思う。
それは恐ろしい事なのかもしれない。
ボクが彼らなら実戦経験は皆無に等しいボクのような奴に負けたら
どう思うだろうか？
決まっている恐怖だ。強すぎる力は畏怖を抱かせ敵を作る。
だから極力使わないでおこう。
今のボクなら彼ら近衛軍に合わせて適当に戦えば何とかなるだろう。
この試合は5人一組で行われる。
5チームでサバイバルを行ってから生き残った2チームでの決勝。
決勝は勝ち残り戦で試合後にチームリーダーが立っていた方が優勝
らしい。
因みに何故かボクはこのチームのチームリーダーを勤めることにな
った。
理由はボクが1番強いからからしい。まったくいくらなんでも過大評
価だ。
ボクが勝てたのは勝利条件の甘さと、この反則能力のお蔭だ。

それを大部分は使わずにこの試合に挑むんだ、強さはツバキ隊長より弱い筈だ。

まぁそんな状況でも全力は尽くすつもりだよ。それだけは保障しておく。

さて、寝るとするか。休息も大事な準備の一つだ。

王都まで5日掛かるんだから今の内に体を休めないとね。

よしっ、決った・・・

王都に行くメンバーを紹介しよう。

まずはレンシアｓ・・・いやレン（近衛騎士になってもらったからには命を預けるも同義、

私の事は他の近衛騎士同様にレンと呼んで下さい。と主人の権限を利用して呼ばされた。）

次にツバキ隊長とルイズ副隊長，ゼルクさんにレイナちゃん。

あとおまけでレイル団長が護衛として付いてきている。

近衛騎士の護衛ってなんなのだろうか？

そしてボクの計7人で大型の馬車で王都に向っている。

この道中、ボクはレンと隊長からある課題を出された。

それはボクの名前を考えることだ。ボクは前の世界の名前を捨てている。

だから名無しのゴンベイ状態なのだが、それでは試合のメンバーとして登録できないらしい。

細かい個人情報は無しでいいが、名前だけは偽名でも名乗らなくてはいけない。

仮に優勝すれば国王と共に戦った騎士として歴史に名前が残るからだ。

そんな華々しい舞台に名無しの不審者はお呼びではないのかもしれない。

しかしボクは既にレンと契約をしている。いつ抜けても良い条件だけど、

それでも試合が終わってからしか抜けることはできないだろう。

まったく安請け合いはするものではないな。

それでもボクはこの皇女様を少なからず気に入っている。

王族の生まれなのに変に偉ぶったりせず、国民や弟君を大切にしている。

孤児であるボクには無い思いやりの心は、

見ているボクまで優しくなっているような錯覚を覚える。

だからこそボクは全力を尽くしてみようと思った。

まぁ少しは腹芸を身につけなくては王族としても王としても失格なので、

ソコは学んでもらわないといけないだろう。

おっと話がそれた、とにかく今のボクは名前を考えている。

リリア，やよい，ひかり・・・

正直に話すと自分の名前を自分で付けると言うのは想像していたよりも恥かしい。

まだ男だったらいい。しかし今のボクは女である。

変に女過ぎず、だからといって男のようにならない名前。

レンから家名・・・つまりファミリーネームは頂いている。

それに合わせて名前を考えるのも難しい。

因みにボクの家名はウェイデッド。この世界の言葉で『白の人』『聖人』という意味らしい。

白の人には納得できるが、ボクは聖人なんて柄ではない。

まぁ、決まってしまったからにはしかたない。それよりも考えないと。

結局ボクがいくつか候補を出してその中からレンに決めて貰うことになった。

「じゃあ候補を聞かせて頂きますね。」

そう満面の笑みを浮かべながらレンが言う。

明らかに楽しんでるだろ？　・・・まぁ良い。

ボクがとりあえず出した候補は三つ。

『マヤ』『メイヤナ』『シンシア』

マヤは前の名前を参考にした。知恵という意味らしい。

メイヤナは道化師という意味だ。

シンシアは黒という意味だ。

正直に言えばボクに1番合うのはメイヤナだろう。

道化師。今のボクを表現するのにこれほど適した名前は無いだろう。

しかし意外なことにレンが選んだのはマヤだった。

理由を聞くと珍しい語呂だからと、他の二つが酷かったからしい。

メイヤナはまだしもシンシアは別にいいのでは？と思ったが、

選んで欲しいと頼んだのはボクなので特に何も言わなかった。

とにかくボクのこの世界での名前が一応決まった。

《マヤ＝ウェイデッド》知恵ある白き人。

まったく大層な名前だよ。

ツバキ隊長の思案・・・

私の名はツバキ＝ロットマン。

第二皇女レンシア＝デモン＝ガルド様の近衛騎士軍隊長だ。

私は最近ある人物について悩んでいる。それは素性をほとんど語らない部下についてだ。

奴はマヤ＝ウェイデッドという名を先日レンに与えられていたが、自分の名前を持っていないと言って一度も本名を語らなかった。

名前が無いのはまだ良い、孤児の者の中には死ぬまで名前の無い者も居る。

しかし奴の話では名前が無いわけではなく故意に名乗らないだけのようだ。

第一、奴が出身国だと言い張るジパングなんて国も存在するか怪しいものだ。

奴は外見を見る限りは１２～１３歳位だろうか。ニンゲンという聞いたことの無い種族だ。

存在しないとされる白い髪に宝石のような紅い瞳。整った可愛らしい顔つき。

奴の胡散臭さを知らなけれ万人に愛される容姿だ。
しかし奴はその外見に反して黒いコートに黒いマントを着ている。
そろそろ冬に入る頃とは言ってもまだソコまで厚着する程でもない。
しかし奴はそんな厚着にも関わらず私達との試合の後も、汗一つかいていなかった。
奴が強いのは認めよう。白銀騎士団のレイル＝ザーシン団長は、
奴が上級の魔物を糸だけで撃退したところを目撃している。
正直私達が敵う相手ではないのだろう。
しかし奴がレンに対して敬意を払わない事は許せなかった。
一応は敬語を使っているが、それでも奴は皇女という肩書きに対して敬語で話している。
無論奴とレンは初対面だ、それは仕方ないのかもしれない。
しかし奴が探る様な目でレンを見たとき、レンの目的を聞いたときの奴の態度。
どうしても奴に一度屈辱を味合わせてレンに敬意を払わせたかった。
それが近衛軍　対　奴の試合だった。如何に奴といえど４対１。
しかもレンから糸の使用を禁じられれば私達にも勝機はある。

しかし結果は散々だった。奴を倒すという目的のために頭に血が上った私は、

部下に庇われ、私が正気でないと知った奴に標的とされた。

私の目の前で奴は消えて、気が付くと後ろを取られていた。

あんな動きを私は見たことが無かった。

彼女は私達には到達できないレベルの強さを持っていた。

そして王都からの道中で私は考えを改めさせられた。

彼女はレンを蔑ろにしていたわけではない。

レンの器の大きさ、主人としてふさわしいかを測っていたのだ。

レンを試していたという事には無論不満が残るが、

仕えるべき主人がどんな存在かを知るには仕方ないだろう。

私は彼女、マヤが真実を話していない事には気に入らないが、

それでも私よりもできた人物であることはわかる。

きっと語るに語れない事情があるのだろう。

だから私は彼女のそういった部分を気にすることを辞めた。

彼女が近衛騎士になる条件に何時でも辞めることができるというモノが入っている。

此処で私が要らぬ事をして彼女を不快にさせてはレンが困る。

彼女の過去は気にしない。しかし彼女の技量には興味があった。

話に聞くと彼女はまだ魔法を使えないという事だ。

コレは彼女が嘘をついている雰囲気ではないので納得している。

つまり糸を操るのも、一瞬で後ろに回りこんだのも全て彼女の技である。

だから教えを請いたいと思ったのは戦士として仕方ないことかもしれない。

糸を操るには手先の器用さがいるだろうから無理だとしても、

あの移動法は是非学びたい。

馬車が止まり、夜営の準備をし終わってから私は彼女に頼んだ。

「マヤ＝ウェイデッド、私に貴殿の技を教えて欲しい。」

闇夜の襲撃

「マヤ＝ウェイデッド、私に貴殿の技を教えて欲しい。」

向こうの世界では見ることができない満天の星空を見ていると、

ツバキ隊長が近づいてきてそう言った。

「ボクの技を？　それは何故ですか？」

ボクは他人に教えを請われるような技を披露した覚えはない。

なのになんでこんなふうに隊長さんから頼まれているのか理解できない。

「試合の時、私は自分の力不足を知った。

そしてマヤ、貴殿の実力が我々の誰よりも上回っていることも知ることができた。

だからこうして頼む、最後に見せたあの移動法だけでも教えて欲しい。

このままでは私たちはレンの望みを叶えられない。」

なるほど、縮地を教えて欲しかったのか・・・

でも教えるなんてとてもじゃないけど無理だね。

「無理ですね、残念ながらあれを今から教えても試合までには間に合わないですよ。
あれは才能があれば数ヶ月、なければ数年の修行が必要ですからね。
」
修行云々のあたりは嘘だけど、教えても間に合わないのは事実だ。
第一にボクにはあれを教えられる程の知識は無い。
「そうか、すまなかった。」
ツバキ隊長は残念そうに肩を落とす。
まったくあの姫にしてこの部下ありだな。自分の感情を抑えられないなんて。
よし、ここは修行を名目に教育をしてやろうか？
いや、ソコまでボクが面倒を見る必要は無いね。
「縮地・・・あの歩法は教えられませんけど、
代わりに短期間で身につけられる技を教えましょうか？」
ボクはそう隊長さんに聞いてみる。上手くいけば修行を名目にストレス発ｓ・・・
いや、イジｍ・・・いや・・・まぁいいや。

「本当か！？　その言葉に二言は無いだろうな？」

隊長さんのテンションが無駄に上がっている。

「大丈夫ですよ。せっかくなので他の方にも教えましょうか？」

ボクは苦笑しながらそう答える。どうせなら他の奴にも教えることになるだろう。

それに、こんな猪上司を持つと部下は苦労するからね。

せめて上司の暴走を止めるくらいの実力にしてあげたい。

そう思うボクはやっぱりお人よしなのかな？

「敵襲！」

突然ゼルクさんの大声が聞こえて来た。

周囲を意識すると、だいたい３０人位の武器を持った男達に囲まれているのがわかった。

どうやら盗賊のようだ。まったく町と町の間で盗賊とバッタリなんて漫画かよ。

とりあえず白夜の試し撃ちにはうってつけかもしれない。

ボクは白夜の引き金に指をかけると盗賊たちに銃口を向けた。

「いい加減になれない馬車には疲れていたんだ、
コレぐらいのストレス発散は良いよね？」
ボクはそう言いながら引き金を引く。
ガンッ・・・ゴバッ・・・
引き金を引いた瞬間、銃口から何か出たと思ったと同時に１０人の男達が空を舞った。
どうやら威力の調節が必要なようだ。一発でこの威力とは・・・
恐らく弾丸を形成するのに使った魔力が多過ぎたのだ。
まぁ３分の１は削れたから後は近衛軍とレイル団長に任せて・・・
そう思ったけど盗賊の方たちはボクに襲い掛かってくる。
どうやらさっきの攻撃がボクによるものだと知られたようだ。
これはボクの責任だし仕方ないね。
ボクは短剣を抜いて構える。接近戦になりそうだしね。
２０対１か・・・厳しいけど所詮はゴロツキ諸君だ、ボクの敵じゃない。
・・・そう思っていた時期がボクにもありました。

おかしい、コレは明らかに統率のとれた動きだ。

コレは盗賊というよりも軍隊だ。

盗賊に扮した他の皇子，皇女の近衛騎士による妨害って考えるのが妥当か・・

ははっ、コレは傑作だ。国の王になろうって奴が闇討ちか？

上等だよ、だったらこっちにも考えがある。

ボクの思案が終わる。後は作業を終わらせるだけ。

「皆様、お越しいただき有難うございます。」

ボクは高らかに声を上げる。

「当サーカスをお楽しみになるのに御代は必要ございません。」

口元に笑みを浮かべて思い出す。

「命が続く限り、当サーカスをどうかご堪能下さい。」

幼い頃に見た彼の姿を・・・

殺人サーカス

「皆様、お越しいただき有難うございます。
当サーカスをお楽しみになるのに御代は必要ございません。
命が続く限り、当サーカスをどうかご堪能下さい。」
それは懐かしい彼の記憶、そう両親が死んでから出会った恩人の記憶。

両親は死ぬ前に、ボクが大学を出るまで、
生きていける十分な金額を残してくれたことを以前話しただろう。
それはたかが1人の生活費や学費等なのだが、それでもかなりの大金だ。
普通の家庭ならそれだけの金額は子供を育てるのに普通に使っている。
しかしそれはあくまで少しづつ給料から消費していくものだ。
それを一括で用意されてしまえば、親戚を狂わせるのに十分な金額だっただろう。

ボクの親戚たちは幼いボクに残された遺産を掠め取ろうと躍起になっていた。

自分で言うのもなんだけど、ボクは幼いなりに親戚たちの考えがわかっていた。

だからボクは親戚が甘い言葉をかけてきたときに、罠にかかるふりをして、

両親の遺産に手を出そうとしたら別の親戚の家に移る生活を6歳まで行ってきた。

6歳のボクは小学校に入学すると、

同時にこの世界に来る前まで住んでいたアパートに移り住んだ。

当然ボクに手が出せない親戚たちは悔しがった。

そして恐ろしい企みを持ってボクの前に現れた。

それはボクに生命保険をかけて殺してしまうというモノだった。

ボクが死んで世間に殺人がバレなければ保険金が入ってくる。

うまく行けば両親の遺産も手に入るかもしれない。

という考えにとらわれた親戚たちはボクを騙して呼び出した。

抗ったけど、それでも大人の力には敵わない。ボクは首を絞められて意識を失った。

殺人なんてしたことの無い親戚たちは意識を失ってグッタリとしているボクを死んだと思い、
ボクを車で橋まで連れていて投げ捨てようとした。そこで意識を取り戻したボクは暴れたが、
やっぱり抗うだけの力が無いボクは再び首を絞められそうになった。
そこでボクは彼に出会った。
「おいおい、よってたかってそんな小さなお子様を殺そうなんて酷いんじゃないか？」
声がした方向を見ると右目に眼帯をした２０代くらいの男性だった。
「うるさい、見られたからにはお前にも死んでもらう！」
親戚の１人がそう叫んで彼に殴りかかったと思った瞬間、その親戚が宙を舞った。
「皆様、お越しいただき有難うございます。
当サーカスをお楽しみになるのに御代は必要ございません。
命が続く限り、当サーカスをどうかご堪能下さい。」
彼はそう高らかに叫ぶと、腰から２本にナイフを抜く。
その後が凄かった。彼はまるでサーカスで道化師が踊るように動き、

ナイフで親戚たちを切り裂き命を奪った。
それは親戚たちのような素人ではなく、命を扱うプロなんだとボクは思った。
ボクは目の前で行われる殺人に対する恐怖よりも、
彼の踊るような動きに眼を奪われた。
やがて最後の1人を切り裂いた彼は、
ボクに歩み寄ってきてボクの頭に手を置いて乱暴に撫で回す。
「俺のことを怖がらないなんて面白い餓鬼だな。」
彼はそう言うとしゃがんでボクに視線を合わせた。
「貴方はボクの命の恩人だよ。なんでそれなのに怖がるの？」
ボクは子供ながらにそう聞いた。その時のボクは彼の言った意味を理解できなかったから。
「ぷ、あはははは、確かに俺は命の恩人だ。だがな坊主。」
突然笑い出した彼にボクは困惑しながら次の言葉を待った。
「俺は殺人鬼だ。怖がらないといけない人種だ。
お前の命を助けたが、次はお前の命を奪うかもしれない。

そんな奴に恩義を感じる必要はないんだよ。

いいか、何で坊主が殺されそうになったかは俺は知らないし興味も無い。

だからお前も俺の事なんて忘れちまえ、いいか、恩義を感じて憧れんなよ。」

彼はそうボクに言って去っていった。無理だった。ボクにとって彼はヒーローになっていた。

結局その後は残りの親戚たちは手を出さなくなってきた。

ボクが彼に殺された親戚たちに何かしたと思っているんだろう。

逮捕されたのも何人か居たけど僕の知ったことではない。

そんな経緯でボクは人よりずれた感性に育ってしまった。

だからボクは殺しは許せても騙しには酷い嫌悪感を抱く。

ボクは近くに居た男の額に短剣を突き刺してそのまま下に引いて切り裂いた。

そのまま返す手で別の男の剣を防ぐ。そう彼の見せた道化師のよう

な踊りで。

ここはボクのサーカスだ。

命を奪う、１人の道化師が踊り狂うサーカス・・・

そう殺人サーカスだ。

騎士道か、うらやましいな～。

１５人目を殺した時には既にボクは肩で息をしていた。

界移動の副作用で身体能力が強化されているといっても、

所詮ボクは運動不足の高校生だったんだ。

そんなボクが全能の力のバックアップがあったとしても、

彼の技術を完璧に再現できるはずもなく、ただただ体力を消耗しているように感じる。

でもここは彼のサーカスではなく、ボクのサーカスなんだ・・・

だったらボクの技を入れていかないといけないかな。

ボクは鋼糸とは異なった糸を作り出してボクが殺した数人の体に巻きつける。

まだこの糸には名前が無い、ボクのオリジナルの糸だ。

鋼糸と違って切断能力が無いが、頑丈で千切れ難く、視認しないく。

ようは人形を操る為の糸だ。仮に傀儡(くぐつし)糸と名づけよう。

死体を兵として操るまでにはまだ練習が必要だけど、

相手の足を止めるのに十分なインパクトを与えられる。
ボクはそう考えて傀儡糸を巻きつけた死体を立ち上がらせた。
「・・・っ」
残る5人が息を呑む音が聞こえると、ボクは鋼糸を出して4人の首に巻きつける。
スッ・・・ゴトッ・・・
あっけなく首のなくなった死体を放っておき、残った1人に歩み寄る。
「誰に雇われました？」
ボクはしゃがみ込んでいるその1人に聞く。
「くっ、誰が貴様のような化け物に話すものか！」
ボクに殺気を放ちながらそう怒鳴ってきた。
普段のボクなら慣れない殺気に怯えていたかもしれないけど、
今のボクは頭に血が上っているのでまったく気にならない。
「ボクが気がつかないと思いましたか？　貴方の言うところの化け物が・・・
さて、教えて下さい。第一皇子ですか？第二皇子ですか？それとも

第一皇女でしょうか？」

ボクは笑みを浮かべながらそう聞く。この笑みは別に愉快だから笑っている訳ではない。

これは一種の心理戦のようなものだ。

相手が笑みを浮べれば何か奥の手があるのではと勝手に勘ぐってしまうのはしかたない。

「・・・くっ、私は第二皇子レクテス様の近衛騎士軍の者だ。」

その心理戦に敗れた男は散々悩んでから肩の力を抜いてそう答えた。

「そうですか、第二皇子が・・・

この事を我が主の前でもう一度話してもらえますか？」

ボクは予想通りの結果に満足している。だまし討ちは嫌いだ。

だけど暴れまわったあげく勘違いでしたという結果になるよりも安堵できた。

「レンシア様の前で？　わかった、私も騎士の端くれ、真実を語ってから逝くとしよう。」

男はそう言って立ち上がる。

「有難うございます。」

ボクはそうお礼を言う、自分の見立て通りの人物であることにホッとした。

「かまわん。だが最後に貴殿の名を聞かせて欲しい。」

「ボクの名前を？　いったい何故ですか？」

もっともな疑問だ、最後の望みくらい叶えてやろうと思ったら、死の前に望むのがボクの名なんて・・・

「我々を全滅させた相手の名前くらい騎士なら知りたいと感じるものだ。」

なるほど騎士道とかいう奴ですか・・・

「ボクの名前はマヤ、マヤ＝ウェイデッドです。」

「知恵ある白き人か。よし、覚えておこう。」

そう言う男をボクはレンの前に連れて行き全てを話させた。

その後の彼がどうなったかはあえて此処では書かないでおこう。

とにかく盗賊に関しての真実がわかって良かったとしよう。

それよりボクは驚いている。何にか？　自分の精神にだ・・・

ボクは人の死を見たことあるから殺人を咎めることはしない。

だけどボク自身が人を殺したのは初めてだ・・・あ、人じゃなかったっけ？

それでも人間とあまり変わらない外見だし、なにより言葉が通じる。

だから少なからずショックは受けると思ったんだけど・・・

まったく、彼女に振られた時はあれだけ悲しく喪失感を感じたのにね。

ここが王都か・・・

やっと王都に到着したよ。　長かったよ、ここまでの道のり・・・

馬車で5日間、慣れないうえに椅子は木製である、とてもリラックスできる環境じゃない。

あぁ、腰が痛い・・・

しかし条件はみんな一緒だから我慢しなくてはと思ったけど、何故かみんなピンピンしている。

恐らくは慣れた者と慣れない者の差なんだろうね。別に羨ましくはないよ。

移動の間、特にやることの無いボクは近衛軍の武器の改良をしていた。

隊長さんとの約束で短期間で何か教えると言っていたけど、

やっぱり武器を改造してそれの使い方を教える方が良いだろう。

楽だし、よけいな勘ぐりはされにくいと思う。

技と言っても魔法が使えないのに変な特殊能力を披露してしまったら説明が面倒だ。

武器職人の知人が居て、武器の改造法を教えてもらっていると言っ

てあるので、

武器に特殊能力をつけても怪しまれないだろう。

こういうときに弊害（へいがい）がでるから滅多な言い訳は口にできないよ。

さて、まずは隊長さんのレイピアから見ていこう。

彼女の体格にはレイピアのサイズは適しているけど、

全知の力が、突くという動作は彼女の筋肉に合わない事を教えてくれる。

隊長さんは剣を振って切り裂くという動作のほうが合っているらしい。

ボクはいっそのこと武器そのものを別物に変えてしまう事にした。

やっぱりイメージに合うのは刀か。

レイピアの時のサイズと重さで、刀の切れ味を損なわないように武器を構成する。

完成したのは刃渡り６０ｃｍの小太刀だ。

これなら風のように速く相手を切り裂くことができるだろう。

我ながら自信作だ。特殊能力は決して汚れず、錆びないといったものだ。

まぁ、これなら刀の使い方を教えれば良いだろう。

次に副隊長くんの弓矢だ。

鳥人の彼は空から地上を狙い打つ戦法を好んでいる。

しかし、弓矢だと矢を準備して放つまでのタイムロスがもったいない。

ボクは思案した結果、白夜のような魔力を弾に変える銃を2丁作ることにした。

コレなら引き金を引くだけだし、何より副隊長くんの魔力次第だが弾切れも無い。

全知で知ったけど、彼の魔力量は常人の１０倍らしい。

威力だけは白夜と違って、最初から通常の銃と同程度に設定しておいた。

盗賊騒ぎの時みたいな弾を彼が撃ったら1発で魔力切れになってしまうからね。

あとは銃の使い方を教えれば弓矢の使い手の彼の眼なら使いこなせるだろう。

次にゼルクさん、彼は西洋刀を使っているが、正直なところ、剣術は苦手なようだ。

そこで棒術を教えてみる事にして、棍(こん)を作ってみた。

鉄製の棍で、特殊能力に伸縮自在をつけてみる。
できあがったら如意棒(にょいぼう)になった。
ゼルクさんの意思で伸び縮みするから後は棒術を教えるだけだ。
最後にレイナちゃんだ。彼女の武器は身の丈以上の巨大な斧だ。
彼女の武器が一番困る、なぜなら怪力に任せて振り回しているだけ、
技も何もあったものじゃない。
だからこそ考えたのは戟(げき)だった。それもただの戟ではなく、
彼女が何かしらの技を使える程度の重量の戟だ。
斧と違ってただ振り回すだけではこの先生きてはいけない。
だからこそ技を身に着けてもらう必要がある。
特殊能力に巨大化ができるようにしておいた。
まぁ説明はこんなものかな。
さて、やっと馬車から開放される。ボクはそう思って止まった馬車から外に出た。
「はぁ～、おっきいな・・・」

ボクの目に初めに飛び込んできたのはスベート城の何倍もの大きさの王城だった。

日本の城には何回か観光で行った事があるけど、比じゃないね。

さて、ここに例の第二皇子様が居るのか・・・

楽しみだ、ボクの前で騙し射ちをしたんだ、覚悟してもらうよ。

設定集？（前書き）

かなり人物が増えたことと、主人公の名前が決まったので再び設定を書きます。

別に読まなくても大丈夫なので飛ばしてもらってもかまいません。

設定集？

《主人公》

・マヤ＝ウェイデッド

この物語の語り部　兼　主人公。

例外（第１２部　ツバキ隊長の思案・・・）を除けばこの人物の主観で物語は語られていく

レンシアと契約し、一時的に第二皇女の近衛軍に在籍中

一人称はボク

《装備》

武器：鋼糸

傀儡糸

魔力銃　白夜

短剣（投擲用）×２

防具：黒のロングコート

防刃手袋（鋼糸が巻きついている）

自称：旅の道化師

技？：殺人サーカス

《第二皇女一行》

・レンシア＝デモン＝ガルド

ガルド帝国皇帝の第４子。悪魔族の為、背中から羽が生えている。

国民を大切に思っており、

まだ幼いながらも王の資質を持つ弟に皇位を継いでもらいたいと思っている。

年齢：１５

能力：中級までの火属性魔法全般

指揮官タイプだが、部下には慕われている。

・ツバキ＝ロットマン

第二皇女の近衛軍隊長の女性。エルフである。

猪突猛進しがちだが、実力は近衛軍では抜きん出ている。

能力：風属性魔法全般

装備：レイピア⇒マヤ製の小太刀

彼女はマヤとの出会いによって隊長として成長していく予定。
基本的に誰かに指示を出すより、指示に従って戦う方が得意である。

・ルイズ＝レルカミア
第二皇女の近衛軍副隊長。鳥人で背中から羽が生えている。
見た目は１０～１３程度で精神年齢もそんなものだ。
空からの奇襲という戦法を好んで使う。
能力：上級までの空属性魔法全般
装備：弓矢⇒マヤ製の魔力銃×２

・ゼルク＝ファレッザ
第二皇女の近衛軍の１人。龍人で体が鱗で覆われている。
元傭兵で、傷ついて死にかけているところをレンシアに助けられて近衛軍に入った。
能力：初級無属性魔法全般　中級無属性魔法［肉体強化］
装備：西洋刀⇒マヤ製の棍　如意棒

・レイナ＝キャレンディア

第二皇女の近衛軍の１人。獣人で何の動物のかわからない耳を頭から生やしている。

レンシアの幼馴染で、そのつながりと怪力を買われて近衛軍に入った。

能力：初級水属性魔法全般　怪力

装備：身の丈を超えた巨大な斧⇒マヤ製の戟

《その他》

・レイル＝ザーシン

白銀騎士団団長。マヤに始めて会った人物。

能力：上級までの火属性魔法全般

装備：白銀騎士団の鎧　剣

実力はかなり高い、しかし生真面目すぎるゆえに地方に左官されてしまった。

《魔法》

魔法にはランクがある、誰でも使える初級魔法から伝説の古代魔法までの5段階だ。

初級魔法⇒中級魔法⇒上級魔法⇒最上級魔法⇒古代魔法

古代魔法は魔法に長けたエルフにも使えるモノが居ない為、

最上級まで身に付ければその属性の魔法全般を覚えたと認められる。

また襲撃か、くどいぞ！

件(くだん)の第二皇子とは意外な形で対面することになった。

レンが到着すると皇帝に顔を見せに行く必要があるとのことで謁見の間に向う、

だけど、何故かボクは隊長さんに付き添いを命じられた。

まぁ護衛なんだろうし、

皇帝がどんな人物かも興味があったので文句を言わずに付いて行った。

謁見の間には皇帝の他にもう1人、黒髪の青年が居た。

レンと皇帝、青年の話から、この青年が第二皇子だと理解できた。

襲撃が失敗しているのによく顔を出せたものだと逆に感心させられたしまう。

彼は俗に言う、イケメンである。

ボクの辞書には「イケメンは死すべき」という文が載っているため、彼を敵にまわすのは好都合かもしれない、問答無用でイケメンが殴れるからね。

さてと、第二皇子については後々語るとしてボクは皇帝を見た。
一見するに、ただの茶髪の中年にしか見えないが、
だけど全知の力で研ぎ澄まされた感覚が、彼の探るような視線を気づかせた
娘と息子との会話を楽しんでいる振りをして、ボクの様子を見ている。
さすがは三大強国の一角の王、かなりのくせ者ってことだね。
「では、これで失礼します。」
レンの言葉で我に返る、どうやら話は終わったようだ。
レンを基準に王族を考えるべきではない事がわかっただけでも良しとしようかな。
退室してからレンの私室まで護衛してから近衛軍に割り振られた部屋に向うことにする。
正直な話し謁見の間からレンの私室は近いから護衛は必要ないと言われたけど、
気まぐれで付いていったのは正解だった。
第二皇子の私兵と思われる集団に現在囲まれている。
囲まれていると言っても、

気配を消して天井裏や壁の向こうに隠れているのでレンは気がついてない。

第二皇子との対話に気疲れしたんだろう。

兄とは言っても自分を殺そうとした相手と話していたのだ、

精神的に辛いのだろう。

さて、また襲撃とは芸が無い、だけどどう追っ払おうか・・・

さすがに二度目だから冷静に考えられるけど、腹立たしい。

いっその事、鋼糸で首と胴の泣き別れはどうか？

本気でそう考えてしまった。確かに楽だけどそれはどうかと・・・

まぁ、レンを部屋に送った後にたっぷりと彼らを締め上げよう。

そう考えて早足で向うことにした。レンの部屋に入り暫く話した後、

「マヤさん、明日から頑張って下さいいね。」

ボクはそうレンに見送られて廊下に出る。

「そろそろ姿を見せてくださいよ。バレバレでしたよ？」

ボクはレンの部屋に聞こえないように扉に防音の特殊能力を付与してから言った。

「ざっと２０人ですか、前回の教訓は生かされてないようですね。」

そう、前回の盗賊事件に比べて人数が少ない。

コレはボクの実力を舐めているということなんだろうね。

実際に顔を見せたときにも少し腕の立つだけのただの少女を演じたからね。

戦力外とボクのことを第二皇子が判断したのだろうか？

まさかそんなことはない、実力不明のボクをレンごと消してしまうつもりなのだ。

残念だったね、もくろみが外れて・・・

ボクは傀儡糸で全員の体を芋虫のように縛り上げた。

「本番は楽しみにしてるよ。」

ボクは縛った連中を全能の力で城内にランダムでテレポートさせた。

さて、疲れた。そう考えてボクは近衛軍に与えられた部屋に戻った。

王都か、東京には行ったことなかったな・・・　（前書き）

最近、主人公が妙に好戦的すぎるような気がしてきました。

コレでは私の思い描く主人公とはかけ離れていきます。

なので今回はほのぼのとした話です。

王都か、東京には行ったことなかったな・・・

翌朝は昨日のことのせいで場内は混乱していた。

明らかに暗殺者の格好をした男達が２０人、場内の各所に突然現れたからね。

それも体をぐるぐるに縛られて芋虫状態で・・・

第二皇子の私兵だと発覚する前に、第二皇子が混乱を沈めたらしい。

まったく手回しが良いね。正直な話し、有難かったよ。

第二皇子が第二皇女を暗殺しようとした事がバレてしまったら、

第二皇子にボクを不愉快にさせた制裁をボク自身の手で下せなくなってしまう。

その点は第二皇子がただ姑息なだけの男で無かったことに感謝した。

ただ第二皇子に傀儡糸の存在を知られてしまったのは残念だ。

ボクが糸使いでもあることは知られてしまった。

まぁ、たいした問題ではないから捨て置こう。

鋼糸だったら大変だけど傀儡糸はあくまで即興品だからね。

さて、この話は此処までにしておこうか・・・

ボクは今、レンとレイナちゃんと一緒に城下街に居る。

何でこうなったのか？

それは朝起きたときのことを思い出してみよう。

今朝・・・

目が覚めたら目の前に赤い髪と青い髪があった。

そう、レンとレイナちゃんの髪の毛だ。

ボクはゆっくりと体を起こして寝ぼけた頭でなんで此処に2人が居るのか思案する。

「おはようございます、マヤさん。」

「おはようございます。」

ボクが体を起こすと2人が挨拶をしてきた。因みに最初がレンで次がレイナちゃん。

どうやらボクの寝顔を覗いていたようだ。

自分の寝顔を見られて居たというのは気恥かしいけど、
そんな事よりボクは鍵をかけて寝たはず・・・
そう思って扉の方に視線を向けて絶句する。
扉は無残にも粉々になっていた。恐らくレイナちゃんの仕業だろう。
殺意を向けられたら起きれるよう体を設定してあるので、暗殺対策は問題ない。
だけど彼女たちのような無邪気（少なくとも悪意は無い）からの行動は論外だ。
明日から結界を作ってから眠ることにして、２人の用件を聞いてみよう。
特に今日は何かあるとは聞いていないし・・・
「何の御用かな、２人とも？　ボクには扉の残骸が見えるような気がするけど？」
用件は別として、扉の件はとっちめないといけないからね。
良い笑顔をプレゼントしながら聞いてみたよ。
「す、すいませんでした、レンがどうしてもと仰ったので・・・」
レイナちゃんは床を砕かんとばかりに頭を地面にぶつけながら土下座する。

怪力でも見た目可愛い女の子にこんな事をされるのは妙な罪悪感を覚える。

「別に怒ってないよ、ただ理由を聞きたかっただけだから。」

ボクは苦笑しながらレイナちゃんの土下座をやめさせる。

頭を上げたレイナちゃんは若干涙目になっていたが、打ち付けていた額(ひたい)は無傷だった。

怪力だけでなく体も頑丈なんだ・・・

「実はマヤさんに城内を案内してあげるつもりだったんです。」

そうレイナちゃんが話し始める。

不慣れなボクを親切にも案内してくれるなんて思っていたより良い子のようだ。

「そこでマヤさんの部屋の前にきたらレンが居たんです。」

そういえばレイナちゃんとはこんなふうに言葉を交わすのは初めてだ。

「実は私も同じことを考えて居たんです。」

レンはレイナちゃんから引き継ぐように話し出す。

「ノックしてもちっとも反応が無かったのでどうかしたのかと思い

まして・・・」

そこでレンが話しづらそう言葉を止める。

「それで・・その・・・」

レイナちゃんも同様に苦笑いをしながらボクの様子を伺っている。

なんなんだろう？

「なにかあったのでは・・・そう・・思いまして・・・」

なるほど、理由はわかった。

「つまり反応の無いボクを不審の思ってレイナちゃんが扉を破壊した。

そういうことだね？」

ボクがそう聞くと2人は頷いた。まったくコレでは責められない。

「わかったよ、ボクの身を案じての行動だから咎めないよ。」

寛大なボクは許してやることにした。

「ありがとうございます。

それで案内なんですけど、実は予定を変えて城下街に行きませんか？」

レンがそう提案してくる。いったい何故？

「その、マヤさんて服は一着しか持っていないようですので・・・

少なくとも寝巻きを買いに行きませんか？」

なるほどこの格好で寝てたから服を買いに行こうと・・・

正直な話は、着心地も良いし、

コートとマント以外は何着も作ってあるから良いんだけど、

せっかくだし城下街を見学するのは悪くないね。

そして現在・・・

王都か・・・そういえば東京には行ったこと無かったっけ。

見栄えより実用性だろ・・・限度にもよるけどね。

城下街におりたレンとレイナちゃんは一般的な庶民の着る服を身に着けていた。

因みにボクはいつも通りの黒コートに黒マント・・・

ボクはこの格好を気に入っているから変装はしない。

旅人だと思われてそれまでだろうしね。

さて、できればボクは武器屋と靴屋を見に行きたい。

武器屋はこの世界ではどんな武器が一般的なのかの調査が目的だ。

それを知る事で試合への対策をいくつか考えることができる。

靴屋は、実はボクは服は数着持ってきたけど靴は今履いてるスニーカーしか無いのだ。

もともと靴を持っていなかったから仕方ないけど、

いつまでもこのままスニーカーじゃ格好が付かない気がする。

だからボクはブーツを買おうと思っている。

以前、歴史の教科書でどっかの軍人が、

ブーツの中にズボンを突っ込むように履いていたのに強い憧れを抱いたことがある。

ボクもそれをしてみたいと思った。

しかし、彼女たちに連れてこられたのは武器屋でも、ましてや靴屋でもない。

そこは服屋だった。何故ボクが？

そう、ボクを城下街に連れてきた理由はボクが服を持っていないと誤解されたからだ。

まぁ、せっかくだから覗いていくのは悪くないと思ったけど、

ここは婦人服用の店らしい。元・男のボクとしては非常に居心地が悪い。

ボクが突っ立っていると、服を見ていたレイナちゃんが近寄ってきた。

「あの、こんな服はどうでしょうか？」

そう言って手に持っている真っ白いワンピースを見せてきた。

「うん、似合ってるよ。」

ボクはそう正直に言った。白いワンピースは見た目中学生位の彼女には似合っている。

「え、えっと・・・私が着るんじゃなくて・・・」
ん？　レイナちゃんが困った顔している。
いったいなんなんだろう？
「レイナが着るのではなく、貴方が着るのですよ、マヤさん。」
いきなり背後に現れたレンがそう言ってきた。
「ボクが？　コレを？」
「はい、貴方はその真っ黒な服しか着てません。
いくら旅人でも不潔ですよ。」
レンがボクを指差してそう言い放つ。
「気が付いてないかな？　ボクは同じ服を何着も持って居るんだよ。」
「だとしても、女の子がそんな影のような格好をしてるのはどうかと思います！」
突然レイナちゃんがそう叫んだ。ここ店内だよ・・・
それに影みたいって、そんな事を考えてたんだ・・・
「見栄えなんて最低限あれば良いんだよ。大事なのは実用性さ。」

ボクはさとすように言う。なぜならワンピースを着るなんて男のプライドが許さない。

「せっかくそんなに可愛いんですからおしゃれしましょうよ。」

れ、レンシアさん？　笑顔なのに目が笑ってないですよ？

「そうです、今のままじゃ宝の持ち腐れじゃないですか？」

れ、レイナちゃん？　なんか怒ってない？

「「着てくれますよね？」」

二人そろって言われました。息ぴったり。

「はぁ、わかったよ。着ればいいんだね？」

諦めたボクは着ることにしました。

決して2人の迫力に恐れをなしたわけでは無い！

本当に！

居るよね、こういった奴らは・・・

ワンピースを着せられた。しかし実際に着てみたらなんてことない気がする。

たしかに今のボクにこのワンピースは似合っていた。悔しいことに・・・

ワンピースなんて着たことの無いボクはレイナちゃんに手伝ってもらった。

しかしその選択は間違っていたと思う。

なぜならボクがブラジャーかそれ準じる下着を身に着けていないことが発覚してしまったのだ。

文明レベルは中世くらいなんだが、様々な種族のいるこの世界では衣服の進化は早い。

様々な種族が着る服を作るんだ、着易く動きやすいをテーマに作っていった結果らしい。

そんなこんなで、ボクはブラジャーのようなモノを身に着けさせられている。

ワンピースでだ。ワンピースは百歩譲ってよしとしよう。

しかし、妙な胸の圧迫感はどうしても気になる。

まぁ、後で改造すれば何とかなるか・・・

ボクはワンピースの上からコートを羽織って、

残りの服を2人にバレないようにイマジンルームにしまった。

ワンピースを着させられた代償に、ボクは武器屋と靴屋に連れていってもらった。

武器屋には剣やハンマー，斧などＲＰＧ系のゲームだ馴染みのある武器が置いてあった。

中には見慣れない武器もあったけど、それはレイナちゃんに教えてもらった。

靴屋にはボクの理想とするブーツが見つかり、購入した。

昼食前にやることを終えたボクたちは適当に食事をとることにした。

実はレイナちゃんもレンも城下街の美味しい飲食店を知れない。

皇女様と、レイナちゃんは貴族の令嬢だったらし。

とうぜんと言えばとうぜんだ。

逆によく服屋や靴屋、武器屋を知っていたな？と聞きたい。

因みに聞いてみたら、知っていたのはレイナちゃんで、変装用に買に行くからららしい。

さすがに皇女様の近衛騎士になると庶民に変装して陰ながら護る仕事もあるらしい。

武器屋は王城御用達（おうじょうごようたし）の店らしい。

そこまで売れているように見えなかったけどね・・・

さて、やれやれ、ご飯を食べる前に運動をしなくてはいけなくなっちゃったよ。

今、ボクたち3人はガラの悪い男達に囲まれている。

殺気は感じないからレン狙いの暗殺者ではなさそうだ。

となると街のゴロツキか・・・

どんな世界にもこんな奴らは居るんだね。

ボクはそう思いながら2人の前に庇うように出る。

レンはともかくレイナちゃんは護らなくても良いだろうけど、偽善心がボクを動かした。

「そんな、警戒しなくても良いだろ、お譲ちゃん？

なに、俺達の宿で楽しいことを教えてあげようって言ってるだけだろ。」

リーダー格の大男が卑下た笑みをボクに向けながら言ってくる。

「白髪なんて珍しいし、いっそ春でも売ったらどうだい？
お譲ちゃんみたいに可愛ければ直ぐに客が取れるぜ？」
「ちげーねーや！」
「「「ぎゃっはっはっはっはっ！」」」
そう良いながら男達は笑う。
ボクは呆れながらこの男達をどうするか考える。
こいつ等のターゲットはボクのようだし、２人をどう逃がすか・・・
「なに黙ってんだ？お兄さん達とお話しようぜ。」
そう良いながら男の１人がボクの肩に手を置いた。

自重しよう。何事もやりすぎてはいけない・・・（汗）（前書き）

久々の更新です。

詳しくは作者の活動報告を読んでください。

自重しよう。何事もやりすぎてはいけない・・・（汗）

「マヤさんに触るな、下郎が！」

そう怒鳴ったのはボクではなく、なんとレイナちゃんだった。

使おうと準備した鋼糸をしまって、ボクは後ろに居るレイナちゃんを見る。

「おいおい、いきなりそれはないんじゃないか、獣人の譲ちゃん？」

ボクの肩に手を置いてる男がそう言う。口調は軽いが顔には青筋が浮かんでいる。

「黙れ！　聞くだけで耳が腐るような声で私に話しかけるな。」

さっきまでと完全に別人のようなレイナちゃんにボクは内心ビビッていた。

どうしちゃったんだい、レイナちゃん？

ボクは困惑した表情でレンをみる。　あ、顔をそらしやがった。

「譲ちゃん、謝ったって許さんぜ？

ただ、今謝れば半殺し程度で我慢してやる。」

リーダー格の大男がそう言いながら剣を抜く。

他の男達も各々武器を取り出してそれをボクたちに向けてきた。

やれやれ、いくらなんでも挑発しすぎでしょ・・・

ボクは怒るようにレイナちゃんを睨む。

「心配しなくて大丈夫です。マヤさんの手を煩(わずら)わせるような真似はしません。」

レイナちゃん、ボクが言いたいのはそういうことじゃ・・・

はぁ～、まぁ1人でやるっていうなら好きにやらせよう。

ボクは後ろに下がってレンの腕を軽く掴み安全そうな場所まで下がらせる。

「マヤさん、レイナなら心配いりませんよ。」

ボクに止めるように言ってくるかと思ったが、レンの口からはそんな言葉が・・・

自分の近衛軍を信頼してる程度のことかと思う。

近衛騎士が街のゴロツキ程度に負けてもらっては試合が不安になるからボクは何も言わない。

「てめぇ！」

レンと話していると後ろから男達の怒声が聞こえてきた。

視線を戻すと何人もの男たちと殴りあうレイナちゃんの姿が。
殴りあうと言っても男たちは武器を持っていて、その武器はレイナちゃんにかすりもしない。
ただ一方的にレイナちゃんの拳や蹴りが男達に叩き込まれている。
ふと気が付くと、ボクは後ろから太い腕を首にまわされ、剣を突きつけられた。
「動くな小娘！　お友達がどうなっても良いのか？」
いかにも三下のやられ役の台詞（せりふ）・・・
呆れを通り越して感動してしまう。小説ではお決まりの台詞だけど生（なま）で聞けるなんて・・・
「・・・くっ！」
レイナちゃんの悔しげな声が聞こえた。やれやれ、仕方ない・・・
ボクは、ボクの首にまわされた腕に鋼糸を巻きつけて引っ張った。
「ぎ、ギャァアアアアアアアアアアア！！」
男はボクを放り出すと傷口を押さえてゴロゴロと転がった。
因みに腕を切り裂いたわけじゃなく、皮膚を軽く裂いただけ・・・

数日で治るような怪我だ。それでもかなり痛いだろう。

「マヤさん！」

レイナちゃんが嬉しそうにボクのことを呼ぶ。

「ボクは大丈夫だよ、レンもね。だから集中しようね。」

ゴロツキとの喧嘩でも集中力を失ってはいけない。

ボクがそう言うとレイナちゃんはゴロツキたちに視線を戻し、

その後、十数分かけてゴロツキたちを行動不能になるまで殴り続けた。

ってか、武器いらなくない？

自重しよう。何事もやりすぎてはいけない・・・（汗）（後書き）

主人公以外では初の戦闘シーンでした。

レイナちゃん、怖っ！

いきなり叫びましたよ。

ゴロツキの皆さん、ご冥福を祈ります（笑）

うまい！　やっぱ貧乏舌には庶民の料理っしょっ！（前書き）

城下街ツアー最終章です。

うまい！　やっぱ貧乏舌には庶民の料理っしょっ！

説教・・・

それは相手の時間を奪う最凶の呪文。

慣れない者ですら数十分の時間を奪い、慣れた者なら数時間も相手を縛る。

恐ろしきその力をボクたちは今、ツバキ隊長によって振るわれている。

レイナちゃんのおこした乱闘騒ぎは王城に居たツバキ隊長にまで伝わって、

レイナちゃんを止めに来たら、行動不能のゴロツキたちの周りにボクたちが居た。

レンを連れ出したことと、暴力行為に及んだことを散々叱られた。

ボクは正当防衛だったのにと言えば、レイナちゃんを止めなかったのが悪いと言われ、

ボクは2人に連れ出せれたと言えば、お前が紛らわしい格好をしているのが悪いと言われる。

はぁ、やれやれ、どうしたモノか・・・

レイナちゃんに助けを求めようと視線を向けても涙目だし、
レンは何が面白いのかニコニコ顔で説教を受けている。
これはどうしたものかな？
「まぁまぁ、その辺で良いじゃないかツバキ君。」
説教を受けていると後ろから若い男が現れてツバキ隊長の肩に手を置いてそう言った。
ボクはこの黒髪の青年を知っている。そう、第二皇子レクテス。
「・・・これはレクテス様、貴方のようなお方がこのような場所に何用ですか？」
たしかにこのような場所だ。ここは道の真ん中だ。
こんな場所で皇女様を説教するのはどうかと思うよツバキ隊長？
例の襲撃の犯人であることを知っているツバキ隊長は警戒しているようだけど。
今のボクにはこの反吐が出るような男が天使に見えた。
それはボクの胸のうちだけにしまっておこう。たぶん墓の中まで持っていく秘密になるね。
「なに、レンが困っているなら兄として助けてあげようと思ってね。」

何が兄としてだ、吐き気がする。

おっと、どうもボクはこの男が嫌いなようだ。

だまし討ちを平気な顔でする奴だからかな？

決して相容れない関係だろうね。

「おぉ、コレは素敵なレディー。謁見の間でも会ったけど素晴らしい美しさだね。

いささか幼すぎる気もするけど、それはそれで人形のような可愛らしさがある。」

なんだ？誰を口説き始めたんだ急に・・・

「名前をお聞かせて頂けるかな？　白髪のレディー。」

ボクか？　ボクを口説いていたのかこの男は？

うぅ、寒気がしてきた、背筋に冷や汗を感じる。

「・・・マヤ＝ウェイデッドです。」

「なるほど、美しい名だね。どうだい？１５になったら僕の彼女にでもならないかな？」

いまから君の成長が待ち遠しいよと言いながらボクを見てくる第二皇子。

「ご冗談を、ボクのようなモノは貴方に相応しくないですよ。
それと勘違いしているようですが、ボクはこう見えて１８ですよ。」
「「「「「じゅうはちぃ？」」」」」
おぉ、第二皇子だけでなく、
レンやツバキ隊長、レイナちゃんあと野次馬の皆さんがそう声を上げた。
いや、確かに身長低いけどさ・・・いくつに見えてたんだろう？
「見えませんか？」
「いや、驚いたよ。まぁ、１８なら堂々と君に求婚できるね。」
うげ、やめてくれ・・・
「じゃあ僕はもう行くよ。じゃぁね、レンとマヤ君。」
やっと行ったか・・・　死ね、イケメン！
「さて、ツバキ隊長、説教はコレくらいにしてご飯でも食べに行きましょうか。」
ボクは呆けてる3人に笑顔を向けてそう言った。
いい加減、空腹で倒れそうだ・・・

「あ、あぁ・・・」

ツバキ隊長はそう言いながら正気にもどる。

「待ってください、１８歳って本当ですか？」

いきなりレンに手を掴まれてそう聞かれた。

「え？　そうだけど？」

「見えません！１２，３歳くらいだと思ってました！」

おい、大声で何を悲しいことを言ってくれるんだこの娘(こ)は？

「レン、人のコンプレックスはいじらないようにしましょう。」

ツバキ隊長がレンをボクから引き離してそう言っている。

聞こえてるよ？　あ、わざとかな？

ぽんっ・・・

ん？　なんだいレイナちゃん？

その「わかってるから、何も言わなくても良い」って言いたげな顔は・・・

はぁ、やれやれ・・・

ツバキ隊長に連れてこられた飲食店は、地味だけど美味しかった。

ピヤングっていう料理が印象的だった。

レンとレイナちゃんは味が薄いって言ってたけど、

王城で出された料理は豪華すぎるから、

貧乏舌のボクにはコレくらいがちょうど良かった。

試合当日 ― 雑魚を一掃してやるぜ！

ボクは今回の試合から魔法を使うことにしていた。

理由は魔法を使ったほうが戦いやすいからかな。

ただの魔法ではあの第二皇子に、

レンに二度と手を出させないような恐怖を植えつけることはできない。

だからボクはこの試合で・・・・

おっと、言ってしまってはつまらないか。

まぁいい。

せいぜい油断しているがいいレクテス。

ボクが味あわせてやるよ。最高の恐怖をね・・・

ボクは今、試合の開会式のため、王城の広場に整列している。

チームリーダーの為、先頭に立って、国王の長い話を聞いている。

まったく、偉い人はどうしてこう話が長いんだろうか？

学校に通っていた頃、一番嫌いだったのが校長の長話だった。
やれやれ、早く終わらないかな。
無論、そんなことは顔に出さず、ポーカーフェイスで話を聞く。
話の中に、最初のサバイバルの話が出てきた。
何でも、王都の中には巨大なコロシアムがあり、
その地下には獰猛な魔物の住む森があるらしい。
サバイバルはその地下の森で行い、勝ち残りを決めるらしい。
そのさい、木を切ること、魔物を殺すことは許可されている。
ボクが戦いたいのはレクテスの近衛軍だ。
整列する時にチラリと見たけど、仮面とマントで姿を隠した怪しい5人組みがそうだった。
全能の力で知ったけど、ツバキ隊長が2人掛りでやっと1人倒せるレベルの相手だ。
なんだかだるくなってきた。
ボクはあんな強者と戦う必要があるのか。やれやら、本当に安請け合いはするもんじゃない。

「師匠、師匠、本当に魔法を教えなくてよかったんですか？」
ボクの後ろにいた副隊長くんがそう聞いてきます。
「ん、大丈夫だよ副隊長くん。もうある程度覚えたからね。」
嘘だよ。全知の力で知識として理解しただけ。
まぁ、普通に覚えるよりも上手く扱えるだろうけどね。
「さすがは師匠ですね。
ところでその、副隊長くんって呼び方やめません？
僕にはルイズ＝レルカミアって名前があるんですよ。」
「だったらその師匠って言うのをやめて欲しいね。
ボクは君に師匠呼ばわりされるようなことを教えた記憶は無いよ。」
銃を教えてから彼は何故かボクのことを師匠と呼んで慕ってくる。
ボクには人から師匠呼ばわりされて喜ぶ人間ではない。
可愛い女の子なら別だけどね・・・・おっと、失言だった。
「何言ってるんですか、こんな凄いものを教えてくれたじゃないですか。」
副隊長くんが銃を出しながらそう言う。

今は開会式中だよ。隠せ、隠せ。

副隊長くんとのやり取りが終わってボクたちは今、コロシアムの地下に居る。

「さて、どう生き残るべきか・・・」

ツバキ隊長がそう呟いている。

今のボクたちは第一皇子，第一皇女の近衛軍に囲まれている。

弱いとこから潰していけば最終決戦には出れるからね。

まぁ、目的はあくまで第二皇子の近衛軍。

不要な役者には退場していただこうかな。

パチンッ・・・

ボクは小さく指を鳴らす。指パッチンだ。

それと同時にボクたちの周りに光りでできたバリアが出来上がる。

古代魔法の一つ、バリア。

バリアは想像とは異なり高度な魔法だったようだった。

指パッチンで発動できるのは全能の力とボクの中の魔力量のおかげだ。

他の近衛軍もツバキ隊長たちも突然の事に驚いてボクを見る。

まだ驚くのは早いよ。

パチンッ・・・

再び指パッチンした瞬間、ボクの視界が白に染まった。

古代空属性魔法、ジャッジメント＝レイ

無数の雷を収束して放つ広範囲型の魔法。

手加減しているから死ぬような事はない。

どうやら第二皇子の近衛軍は自力で助かったようだね。

こうしてサバイバルは地下の森を焦土と化す代わりに、

第二皇子と第二皇女の近衛軍が勝ち抜いた。

勝ち残り戦？―もう少し粘れよ・・・

「あの魔法はなんだ？」

最後の勝ち残り戦の舞台に向かう道中にツバキ隊長がそう聞いてくる。

「それはどちらの魔法のことですか？」

ボクはとぼけるようにそう聞き返した。

「両方だ！　あれは古代魔法だ、違うか？」

「ご名答です。先日覚えました。」

ボクはそう答える。嘘をついたって仕方ない。

「覚えただと？　いや、お前ならありうるか・・・」

この人はボクを過大評価してるのではないだろうか？

「だが、解せないのはお前は詠唱せずに指を鳴らして魔法を使ったことだ。

あんな使い方をする者はエルフにすら存在しない。」

さすがエルフ、魔法に詳しいね。

「それは企業秘密ということにしておきます。
ボクの編み出した方法が広まれば大変ですからね。」
強大な力を最短の動作で使えるようになる。
こんな方法が広まれば戦争に使われることは間違いないだろう。
もっともそんな方法は存在しないけどね。
ボクは全能の力のアシストで魔法を使っている。
指パッチンなんてしなくても魔法は使えるけど、指パッチンはフェイクだ。
相手にボクが魔法を使うときに指パッチンをすると思い込ませれば相手を惑わせることができる。
指が鳴ったのに魔法が発動しないとか、鳴ってないのに魔法が発動するなどだ。
敵を騙すなら味方から・・・
だからボクは何も言わない、語らない。
「む、まぁ良いだろう。こんなところでお前を敵にまわしては元も子もないからな。」
「懸命なことです。」

ボクはそう薄く笑う。そこで会話を終えてツバキ隊長は前を見る。

「・・・いよいよ最後の戦いだ。」

そう彼女が呟くのをボクは黙って見ていた。

決勝の勝ち抜き戦、ボクの出番は驚くほど早くまわってきた。

もっともボクは驚いてはいなかった。

それだけ相手側との能力が違いすぎる。

相手は手加減したとは言っても古代魔法を防ぐような実力者。

ボクが武器を与えて底上げした程度の実力ではかなわない。

これがチーム戦ならあるいはチームプレーで実力差をうめられたかもしれない。

だけど個々の力では遠く及ばない。

まぁ、一人倒せただけでも良しとしよう。

そういうわけで、ボクは2人目と相対している。

計画通り、第二皇子に恐怖を植え付けられるか・・・

いや、やらなければボクの仕事は完遂できない。

だったら思うようにやるだけだ。

さぁ、ショーの始まりだ。

勝ち残り戦？一目当てのものは最後にいただく。

相手は、第二皇子の近衛軍の２番手、日本風に言えば次鋒（じほう）だ。
１人目を倒して満身創痍だったツバキ隊長を一撃で倒した相手。
その時に見えたが、武器は十字架のような形の剣のようだ。
その相手が今、仮面とマントを脱ぎ去ってボクの前に立っている。
見た目は１０代後半の優男だ。
ただ、纏（まと）っている空気が違うというやつだろうか？
あきらかにレンの近衛騎士たちとは雰囲気が違う。
殺人鬼。そう、彼に似たモノをボクは感じていた。
「君がチームリーダーですか？　見るからに人数あわせで連れてこられたようですね。」
男はボクを観察するように見ながらそう聞いてくる。
「何故そう思ったんだい？」
ボクは笑みを浮べながらそう聞いた。
「ん？　そうですね。君が戦士の目をしていないから、ですか・・・

どちらかと言えば民の目、戦う者では纏(まと)わない平和ボケした空気をしているからですね。

いまから棄権するなら見逃しますよ？そんな空気で対峙されていると殺したくなるのでね。」

なるほど、ここまでの力量を持つと物事の本質が見えてくるわけか。

まぁ、ボクを殺せるかと言われたら、ＮＯと答えてあげよう。

「そうかい？　だったらボクの答えは否だよ。」

「そう・・・ですか！」

答えながら男はボク目掛けて十字架形の剣を振り下ろした。

振り上げる動作も見えなかった。

そのままボクの体を剣が切り・・・裂かなかった。

「なっ！？　・・・手ごたえが、無い？」

男は驚くような顔でボクを見る。

ボクのロングコートは、どんな攻撃も霧に攻撃したかのようにボクの体ごと通り過ぎてしまう。

だからボクへの攻撃は無意味。

「もう終わりかな？　だったら今度はボクから行くよ。」

パチンッ・・・

指を鳴らした瞬間、男は吹き飛ぶ。

「ぐぅっ・・・な、何なんですか、ソレは！？」

上手く体勢を立て直した男はボクを、

いや、ボクの体を覆(おお)うソレを指差してそう聞いてきた。

ソレは漆黒の魔力で形成されたボクの3倍の大きさの半透明な鎧武者の上半身。

右手には身の丈を超える大きさの刀を持ち、無手の左手が男を殴り飛ばしたのだ。

コレが古代無属性魔法『魔神の鎧』

最上級までの無属性魔法とはまったくことなる古代無属性魔法の力。

最初に知った時に思ったのは「ナ○トのス○ノオみたいだな・・・」だった。

「どうする？棄権するなら見逃すけど・・・」

ボクは男に言われた言葉をそのまま返す。極上の笑みをプレゼントしながら・・・

「・・・前言を撤回させてもらいますよ。君は私達以上に危険な目をしている。

私では相手になりませんね。いえ、君の相手をできる存在は居ないのかも知れません。

ここはお言葉に甘えて棄権させてもらいます。」

「懸命なご判断だことで・・・」

「勝者、マヤ＝ウェイデッド！」

男の降参宣言によってボクの勝利が審判によって高々と告げられる。

残りはあと2人か、先が長いね。

まぁ、最後の相手はあの男だから、楽しみだよ。

勝ち残り戦？一面倒だ、まとめて相手してやるよ。

相手サイドの3番手は舞台に上がってきた、

ボクは魔神の鎧を消して向かい合うように立つ。

「・・・審判。」

ボクは選手が出揃ったことで安全地帯まで退避しようとしている審判を呼び止める。

「なんですか、マヤ殿？　準備がまだ終わっていないのですか？」

審判を勤めている将軍のカルロスさんは呼び止められたことに驚いたのか、そうたずねてくる。

「いえ、準備は済んでいます。ただ些か面倒なんですよ。

・・・・1人ずつ相手をしていくのが。」

ボクは笑みを浮べてそう答える。

「だからここは2対1でやっても良いですか？無論相手側が2ですよ。

ボクが興味があるのは向こうのチームリーダーだけなんですよ。」

ボクがそう続けるとカルロスさんは渋い顔をして、

「相手側が許可するなら良いでしょう。だが、宜しいのか？
レンシア様の皇位継承は貴女にかかって居るんですよ。」
そう、諭(さと)すように言ってくる。
「かまいませんよ。負けるつもりは皆無です。」
ボクがそう言うと向こうの3番手が殺気を放ってきた。
やれやれ、油断してくれると楽なのに、強がりだとは思ってくれないようだね。
まぁ、あんなの（魔神の鎧）見せた後に侮(あなど)る方がおかしいか。
「我々はかまわない。」
舞台の外に居る向こうのチームリーダーがそう言ってくれた。
と、同時に向こうの４番手も舞台に上がってくる。
「有難う。これでボクも少しは全力が出せるよ。」
ボクはそう挑発するように言うと、３番手がボクのほうに突っ込んできた。
まだ開始の合図も無いのに・・・
どうやら相手の3番手は短気なようだ。

ボクは白夜を構えて3番手に向けて魔力でできた弾丸を放った。

「っ・・・その武器は既に知っている。」

そう言いながら弾丸を紙一重で避(よ)ける。声からして3番手は女性だ。

どうやら副隊長くんの魔力銃を見てボクの白夜がどんなモノか知っているようだ。

そのまま懐(ふところ)に入られたので短剣を出して迎撃しようとする。

しかし、3番手は地面を蹴って後ろに跳んだので、ボクの攻撃は避けられてしまった。

「貴様、この程度の腕前で我らに2人で来いと言ったのか？

魔法の実力はあるようだが、魔法使いでは我らに勝てぬことを思い知れ！」

そう言いながら3番手はマントと仮面をとってボクに姿を見せる。

２０代の女性で、褐色の肌に筋肉の鎧を纏っている。まさに鍛え上げられた女戦士。

武器はどうやら両手の鉤爪(かぎづめ)のようだ。

「まさか、今のでボクの実力が見れるなんて思ってもらっては困るよ。」

油断してくれたほうが戦いやすいけど、それでは駄目だ。
ボクの目的は恐怖を植え付けること。たかが2人に苦戦はできない。
「まぁ、お遊びはここまでで良いかな。」
ボクは傀儡糸を出して3番手の体に巻きつける。
「っ・・・　例の糸使いとは貴様だったのか。
だがこの糸に対しての対策は既に付いている。」
そう言って3番手は鉤爪で傀儡糸を蜘蛛(くも)の糸のように軽々と引きちぎった。
「わぉ、コレは驚いたよ。　まさかあの短期間で傀儡糸を引きちぎれるようになるなんて。」
正直な話し、本当に驚いた。　まぁ、いずれはとは思ってたけどね。
「ふん、この程度で驚いてもらっては困る。」
「確かに・・・ねっ！」
ボクは前方に倒れるようにかがんだ。　４番手が後ろから攻撃してきたからだ。
「ほぉ、今のを避けるか。」
４番手はそう言って屈んでいるボク目掛けて剣を振り下ろした。

「当たり前だよ。君は気配を消すのがヘタだったからね。」

ボクは白夜の銃身で剣を受け止めると同時に立ち上がる。

2人の戦闘のプロを同時に相手するのはアマチュアであるボクにはやっぱり荷が重い。

「ほぉ、暗殺のスペシャリストである奴の気配の消し方がヘタだとはな。」

3番手が感心したように言ってくる。全知の力を利用したハッタリだけどね。

「さて、ボクは曲絃師だ。だからボクは糸で戦わせて貰うよ。」

そう言ってボクは手袋に巻きつけてある糸をたらす。

「馬鹿め、貴様の糸はさっき貴様の前で引きちぎって見せたではないか。」

「あんなのはボクが即興で作った糸だよ。

本当の曲絃師が使う糸を見せてあげるよ。」

ボクはそう言って3番手の鉤爪と4番手の剣に糸、鋼糸を巻きつける。

そして軽く指を引くと同時に2人の武器はバラバラに切断された。

「なっ！？」

「呆けている場合かな？」

うろたえている3番手のところまで一瞬で移動すると、ボクは鳩尾に拳を叩き込んだ。

無論、ただの拳ではなく、無属性魔法で強化した拳をだ。

3番手はそのままうつ伏せで倒れた。・・・死んでないよね？

4番手は3番手が倒されたことで警戒している。

「どうする？　棄権するなら見逃すよ？」

「冗談が上手いな？」

ボクの忠告に4番手はそう返した。

仮面とマントでどんな表情をしているのかわからない。

「そうか、なら・・・」

パチンッ・・・

指を鳴らすと同時にボクの背後に炎の龍が現れる。因みに東洋風の龍。

古代火属性魔法　炎龍

それがこの龍だ。

「もう一度聞くけど、どうする？これが最終勧告だよ。」

「・・・くっ、棄権しよう。」

４番手はそう悔しげに言う。その宣言でボクの勝利が宣言された。

やれやれ、殺さないのがこんなに難しいとは思わなかった。

いよいよあの男の出番か、楽しみだ・・・

勝ち残り戦？一面倒だ、まとめて相手してやるよ。（後書き）

やっと次で勝ち残り戦が終わります。

いやぁ、長かったですね。

今さらですけど、

いろいろ無茶苦茶になっている気もしますので、観想指摘お願いします。

勝ち残り戦？一体を殺せないなら・・・

さてと、いよいよあの男の出番か・・・

そう考えていると最後の1人、あの男が現れる。

「戦う前に一つ聞いていいですか？」

ボクはそう男に確認をとった。

「・・・何か？」

あの男は短くそう返す。

まったく無理してそんな堅苦しく喋るなよ。体が痒くなるじゃないか。

「なぜ近衛軍の戦いに貴方が出てくるんですか、第二皇子様？」

ボクは嫌味にならない程度の笑みを浮べてそう聞いた。

「ふっ、ふっふっ、はぁっはっはっは・・・何故私が第二皇子だと？」

あの男、第二皇子レクテスはひとしきり笑った後、ボクにそう聞いてくる。

「しいて言えば魔法ですね。　貴方の近衛軍は要注意でしたので魔法で調べたんですが・・・

驚きましたよ。まさか貴方がチームリーダーとして戦いの場に出てくるなんて。」

これは半分以上は本当だ。魔法ではなく全知の力を使って調べたという違いだけ。

まさかレクテスが戦いの場に出てくることも、一流の剣士であることも予想外だった。

「いや、さすがはマヤさんだ。その容姿からただ者では無いと思っていたけど・・・

まさかソコまでの魔法の腕前とは。古代魔法なんて始めて見たよ。」

いや、容姿に凄さは関係な・・・あぁ、髪の色か。

「お褒めいただき光栄です。レクテス様。」

「いやいや、謙遜することはないさ。

君は僕の妻に相応しい。改めて僕の妻に、王妃にならないかい？

僕の剣と、君の魔法があれば王国や皇国も配下に置くことができる。」

やれやれ、夢は世界征服ですか？

「お断りします。以前にも言いましたがボクのようなモノは貴方に相応しくない。」

「・・・ふられてしまったようだね。

で、君はどうするのかな？　僕は一応王族だ。

その王族にたとえ正体を知らなかったと言っても、

かすり傷一つつければばどうなるか・・・聡明（そうめい）な君ならわかるだろ？」

やっぱりそうきたか。

「降参するのをお勧めするよ。

なに、私の近衛騎士として雇ってあげるから負けた後のことは気にする必要は無いよ。」

「そうですか。・・・ですがお断りします。」

「なに？」

意外そうにレクテスが顔を歪める。

ボクを不快にさせた罰だ。存分に味わうがいい。

パチンッ・・・

ボクは指を鳴らした。

ボクたちは今、赤黒い空間に浮かぶ平らな岩の上で対峙している。

「ここは？」

レクテスは落ち着いた様子でそう聞いてくる。・・・つまらない、少しは慌てろよ。

「幻術空間（イマジンワールド）とでも言えば良いかな？　ここは幻の世界だよ。」

そう、体に危害を加えられないなら心を壊してやれば良い。

この世界に幻術などの精神攻撃系の魔法は存在しない。だから証拠は無いから罪に問われない。

「幻？　そんなこともできるのか。

それで、その幻を使って何をしようって言うんだい？」

レクテスはそう笑みを浮べてそう聞いてくる。幻と聞いて油断しているんだろう。

「なに、体が駄目なら心に恐怖を植えつけようと思って。

ちなみに幻といっても痛覚はあるからね。」

「なんだと？」

ようやく驚いてくれたね。

「ボクは君が気に入らない。何がかと言われれば騙し討ちをしたということかな。

ボクは何より騙す行為に嫌悪感を抱くからね。」

ボクはそう言って幻術空間に剣を無数に作り出す。

何の為か？　刺すためにさ。レクテスの体を・・・

「そ、その剣で僕をどうするつもりなんだ？」

無数の剣を見た瞬間、

恐怖に顔を歪めながら震える指でこちらを指差し、レクテスが聞いてくる。

愉快愉快（ゆかいゆかい）

「はぁ、見ればわかるだろ。指すんだよ。君の体に。」

「ふざけるな！　僕は世界を統べる者だぞ！」

「残念（ざんねん）だけどレンが勝つからソレは無理だよ。」

ボクはそういって１０本の剣をレクテスの体に突き刺す。

「　　」

言葉にならない絶叫を上げてレクテスが倒れる。

「言い忘れてたけどこの空間では死ねないから。

そうそう、この空間内でどれだけ時間が経過しても元の世界の一瞬でしかないから。

２４時間はじっくり楽しんでいってね。

ほら、追加の剣だよ。」

そういってボクはさらに１０本の剣を突き刺した。

現実世界でボクが指を鳴らした瞬間レクテスが倒れたのを見て周りが歓声をあげる。

どうやらボクとレクテスの会話は聞かれていなかったようだ。

これでレンが皇位を継承できる。

もっとも第一皇子と第一皇女はまだしも、

レクテスはもう再起はできないだろうから脅威ではないね。

さて、レクテスは突然倒れたと言えば良いだろう。

外傷も何も無いし、全能の力でかけた幻術だから魔法では見破れないからね。

さて、コレでレンとの契約も終わりか。

これからどうしようかな？

国のトップが私情に駆られるな！

「マヤ＝ウェイデッドよ、お主がレクテスにした仕打ちがどういうことか理解しておるか？」

ボクの前で剣を握り締めた皇帝がそう聞いてくる。

やれやれ、皇帝ともあろう男が身内に対する感情を抑えられないなんてね。

「陛下、私（わたくし）がレクテス様に何をしたと仰（おっしゃ）るのですか？

私（わたくし）には陛下がお怒りになるようなことをした身に覚えがございませんが？」

ボクは微笑をうかべながらそう聞く。

証拠を見つけられないのに一番近くに居たからなんて理由で疑られては困る。

・・・・まぁ、ボクが犯人なんでけどね。

試合が終わった後、レクテスが５番手の正体だと発覚した。

一時期、会場に騒ぎが起きたが、なんとか静まって閉会式がおこな

われた。
優勝したボクたちの主、第二皇女レンシアが次期皇帝になると正式に決定した後、
ボクはレンと共に謁見の間に呼ばれ、こうなっている。

「とぼけおるか。
ではレクテスは何故、突然倒れ、目覚めてからも気が狂ったように暴れるというのだ？
お主が何かをレクテスにしたのであろう？」
む、さすがに皇帝、怒り心頭なご様子だけど冷静さを失っていない。
そこらへんは傍（そば）でオロオロしている我が主殿（レンシア）にも見習って欲しいね。
「皇帝ともあろう方が憶測（おくそく）でモノを言わないで下さい。
私（わたくし）がレンシア様を？　ご冗談を、あの方は私（わたくし）が魔法を使おうとした瞬間、
突然気を失われてしまったのですよ？」
２度の試合で指パッチンで魔法を使えると皇帝は解釈しているようで、

はたから見ると、鳴らしたと同時にレクテスが倒れたように見える。
だからこの言い訳は充分に通用する言い訳だ。
「むう、しかしお主は指を鳴らす前にレクテスと会話をしていたようだが？
その時にレクテスの意識を奪い、気を狂わせる何かを言ったのではないのか？」
どうやらこのおっさんはよっぱどボクをレクテスの仇（かたき）にしたいらしい。
「あぁ、あれですか・・・
あれはレクテス様とは知らずに少し世間話をさせていただいただけですよ。
何故マントと仮面を被って居るのか？　とかですね。」
ボクはそう答えて皇帝とレンの様子を伺（うかが）う。
「・・・どうあっても自身が下手人ではないと言うのか？」
「えぇ、ソレが真実ですので。」
言い切った。同時に皇帝の剣が振り下ろされる。
「お、お父様っ！？」

レンの慌てる声が聞こえる。しかしボクは特に何もする気は無かった。

防御も、回避を、反撃も。

ピタッ、という効果音が相応しい見事な寸止め。

全知で知っていたので特になんとも思わない。

「・・・何故避けん？　お主なら避けるだけでなく私の命も奪えたはず・・・」

「買い被り過ぎですよ。ただ私(わたくし)は陛下を信じただけです。」

「・・・私を信じた？」

「えぇ、国のトップたる貴方なら、根拠の無い私情よりも論理を優先してくださると・・・

そう私(わたくし)は信じていただけです。」

口からでまかせ、自分が嫌になる。まぁ、こう言うしかないかけどね。

ボクの私情でレクテスを廃人にしたんだ、論理を優先した皇帝は素直に尊敬しても良いかな。

「・・・レクテスの件に関して疑ったことを謝罪する。すまなかった、マヤ殿。」

しばらく考えた後、皇帝が剣をおさめて頭を下げてきた。

「頭を上げて下さい陛下。お子さんが情緒不安定なってしまっては、父親としてしかたなかったと私(わたくし)は理解しています。」

国のトップに簡単に頭を下げられても困る。

「む、そうか。」

その後、色々とあの時の詳しい状況とボクの魔法について聞かれた。

ボクは当たり障りの無い返答で答える。

「今日はもう暗くなってきた、マヤ殿はもう休まれよ。

レンシアには話ておきたいことがあるのでな。」

ようは話が終わったからさっさと下がれって事か。

「マヤ殿、レンが皇帝になった後も国を支えてくれることを期待する。」

退室する直前にそう皇帝が声をかけてきた。

「さぁ、それはわかりませんね。」

ボクはそう言い残して退室した。

風の向くまま（以下略）って感じにはいかないんだ・・・それが現実

・・・ボクは考えている。

このまま帝国に残れば美味(おい)しい生活ができる。

皇帝、もしくは皇帝の姉の近衛騎士・・・

三大強国の一角でその役所は美味(おい)しすぎる。

でもボクがしたいのはそんなことじゃないし、

そんな事をさせるためにあの監視者はボクをこの世界に飛ばしたわけじゃない。

いずれ、ボクはこの世界でやらなくてはならないことができる。

もしかしたら世界を敵に回すかもしれない・・・

世界を敵に回す？　・・・まぁ、できなくもない気がするのが恐ろしい。

ボクの意思では絶対にやらいけどね。

いずれは別れの時はくる。必要以上に馴れ合わないほうがいいのはわかっていたよ。

レンシアの目的の為に皇帝にまで押し上げてやったし、障害になる

第二皇子(レクテス)を排除した。

これ以上、ボクにやらないといけないことがあるとは思えない。

しいて言えば、近衛軍の強化かな・・・

まぁ、武器も渡したし、あとは使いこなせるようになれば第二皇子の近衛軍よりも強くなれる。

やっぱりボクのやることは無いのだろうね。

「明日、この国を出よう。」

小さく呟き決意する。頼られるのは良いけど依存されてはかなわないからね。

「近衛軍をやめる！？」

「な、何故いきなりそんなことを？」

ボクは近衛軍を抜けるため、主であるレンシアにその旨(むね)を伝えると、

レンシアだけでなくツバキさんまで驚いている。

「えぇ、もともとボクは根無し草の風来坊。
勢いで近衛軍に入りはしたけどそろそろ辞め時だろうからね。」
これ以上いたら逆に辞めにくくなる。
ただでさえ白髪で目立つのに、詠唱破棄で古代魔法を披露してしまっている。
無名のボクだからこそ、誰なのかという探りが大きい。
特に次の皇帝を決める試合だっただけに他国の軍関係者や貴族も見に来ていた。
そんななかであれだけ目立つことをして、そのまま帝国に残っては暗殺対象まっしぐらだ・・・
戦争になればボクは一番の強敵だからね。
そう説明するとレンシアもツバキさんも納得してくれた。
「まぁ、ボクはこれから世界を見て回るけど、もしかしたら帝国に戻ってくるかもしれない。」
「ならそのときまでにこの国をもっと素晴らしい国にしてみせます。」
ボクたちはそう言いあって笑った。

ボクはもう近衛軍じゃない。

だからレンシアのことはレンと呼ばないし、ツバキさんのことを隊長とも呼ばない。

けじめは必要だからね。

「じゃぁボクはもう行くよ。他のみんなにも宜しく伝えておいて。」

早朝なのも相まって、この場にはレンシアとツバキさんしかいない。

だからルイズくん、ゼルクさん、レイナちゃんには挨拶できなかった。

少しさびしいけど、これ以上いたら嫌な予感がするので早々に引き上げることにした。

まぁ1人盗み聞きしている子がいるけどね。

「まって下さい、私も連れて行ってください。」

いきなりレイナちゃんが入ってきてそう大声で言った。

「・・・聞いてたのは知ってたよ。だけどそれは考えてものを言っているのかな？」

ボクに付いてくる。それは国を抜けることを意味する。

もしかしたら祖国を敵に回す可能性もある。

それに彼女自身の立場も問題だ・・・

「はい、私はこの間の試合で思い知りました。私にレンを護る力が無いことを・・・」

「それで？　ボクに付いてくれれば強くなれると思っているの？」

ボクはあえてキツめに咎(とが)めるように言う。彼女の人生を左右する問題だ。

曖昧(あいまい)に決めてもらっては困るからね。

「はい。マヤさん・・・いえ、師匠の力は凄いです。

直接教えてもらえなくても戦う姿を見ることが私を向上させてくれると思いました。」

はぁ、やれやれ・・・

「まぁ、君が良いならボクはもう何も言わない。

だけどレンシア・・・君の主に意見を聞かないとね。」

ボクはそう言ってレンシアを見る。

「あ・・・」

レイナちゃんも気が付いたのかレンシアを恐る恐る見る。

「私は良いですよ。レイナは私の部下であると同時に大切な友人で

す。

私は友人として新たの門出を迎える友を祝福します。

ご両親には私から伝えておくので行って来なさいレイナ。」

はぁ、しかたない。

「わかった。レンシア、レイナちゃんは責任を持って預かるよ。」

「宜しくお願いしますマヤさん。」

「じゃぁレイナちゃん。君は旅の準備は良いのかな？」

「あ！」

「ははっ、じゃぁ1時間後に城下町のあの店で待ってるよ。」

あの店とはツバキさんに教えてもらった飲食店だ。

最後にピヤングをもう一度食べてから出国したい。

ボクはレンシアともう二言くらい言葉をかわしてから、

古代無属性魔法　転移（テレポートのような魔法）で城下町へ向った。

さて、旅に必要なものでもそろえるか。

風の向くまま（以下略）って感じにはいかないんだ・・・それが現実（後書き）

・・・タイトル（サブタイトル込み）と主人公のイメージが違いすぎると、

先日友人に指摘されました。ｏｒｚ

作者も４話目を書いているあたりで気が付いていました。

まぁ、タイトルは・・・

作者の心の叫び　兼　主人公の台詞を過激にしたもの

ですね。いまさらですがね。

そういえば主人公の口癖は「やれやれ」のようです。

友人に指摘されて見てみればたしかにその台詞が多かったです。

どれだけ主人公に苦労させているんだ作者は・・・・

エピローグ：調子に乗りすぎた・・・はぁＯｒｚ

何故こうなった？

それが今のボクが考えるべき唯一にして究極の問題だ。

そう、何故こうなったのか？

答えはわかっているし、その理由の大半はボクの責任だということもわかっている。

でも考えずにはいられない何故・・・って。

ーーーーー数分前ーーーーー

「さて、こんなものかな。」

今日は運がいいのかもしれない。

たまたま今日は市が開かれている日で食料が安く大量に手に入った。

イマジンルームの冷蔵庫に入れておけば保存もできるから本当にラッキーだ。

まぁ、こういった良い事の後には悪いことが起きることを経験で知っているけど、

取り合えず今はこの幸運に感謝しよう。

そう思いながら集合場所の店に入った瞬間、絶句してしまった。

レイナちゃんが居るのは問題ない。

ただ、何故かルイズくんとレンシアが居る。

・・・何故？

まぁ、百歩譲ってルイズくんが居るのはよしとしよう。

おおかたレイナちゃんがボクに付いてくると知って、自分も、と考えたのだろう。

ボクのことを師匠って呼び始めたのは彼だからね。

まぁ、これは理解できるから後回しにしよう。

問題はレンシアだ。

自国の王都とはいっても、表向きは次期皇帝の立場なんだ。

あの結果を気に入らない人物に命を狙われるかもしれないのに気軽に出歩くのはどうかと思う。

次に王都に訪れたら死んでましたって聞くことになりそうで怖い。

恐らくはボクやレイナちゃんの見送りなのだろうけど、無用心すぎる。

「あ、師匠！」

ようやくボクが入ってきたことに気が付いたルイズくんがそう声をかけてきた。

「ルイズくんか、見送りに来てくれたの？」

「なに言ってるんですか、僕も師匠の旅にお供します！」

・・・やっぱりか。

「親御さんやレンシアが良いならかまわないよ。」

「大丈夫です許可は貰っています。というより両親は師匠についていって学んでこいって。」

あぁ、この子の両親もそういう乗りなのか、なるほどまぁ良いだろう。

「あ、あのマヤさん。」

ルイズくんと話しているとレンシアが話しかけてきた。

「あぁ、レンシア、もしやとは思いますが・・・」

なんだか嫌な予感がするので聞いてみる。

いくら無自覚でも護衛もなしに城に戻るようなマネはしないだろうから。

「はい、実は・・・」

ピヤングを食べながら説明を聞いたボク。

話をまとめると、ボクが試合で目立ちすぎたことが原因である。

昨日、ボクが退室した後に、次期皇帝に第三皇子を推薦することをレンシアは話したらしい。

皇帝もうすうす第三皇子の素質に気が付いていたので了承したそうだ。

だけどそれはボクという強大な力の手綱(たづな)を握ったレンシアが、

第三皇子の補佐をすることを前提に考えていたらしい。

その翌日にレンシアからボクが旅に出るという話を聞いて、

せめてボクが他国に付かないように見張る為について行けと命令されたらしい。

ボクがやめるかも知れないことを言わなかったレンシアも悪ければ、

ボクの手綱(たづな)を握ることを条件に、
第三皇子の件を許したことをしっかり言葉にして言わなかった皇帝もいけない。
だけど、やっぱり皇帝をそこまで恐れさせる力を披露(ひろう)してしまったボクが1番悪いのだろう。
ツバキさんとゼルクさんは不在中に帝国でのレンシアの立場を悪くしないために残ったらしい。
まぁ次期皇帝の重圧に耐えられずに逃げ出したなんて噂が流れたら困るからね。
「わかったよ。じゃぁ、出発しようか。」
そう言ってボクは立ち上がる。
思ったより大所帯になったしまった。
馬車を購入しないとね。さて、騒がしくなるな・・・

エピローグ：調子に乗りすぎた・・・はぁＯｒｚ（後書き）

長らく更新できずすいませんでした。

第二部を書く予定でしたがネタがぜんぜん思いつきません（泣）

なので一度ここで完結させていただきます。

中途半端ですいません。

第二期は書けたら別の作品として書いていくかもしれません。

期待せずにお待ち下さい。

これまで有難うございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1979j/

何をやらせたいんじゃ〜！！

2010年10月11日03時16分発行